

- S X07** S X01の南に接して掘られた円形の落ち込みである。直径1.25mの正円形で、深さ40cmである。底面は平坦である。上層部に10~30cm大の河原石の集積がみられる。埋土上層部より陶磁器片が出土している。
- S X08** S X02を切って掘り込まれた不整形な落ち込みである。南北3.5m、東西3.0m、深さ45cmである。埋土内からは中世の須恵器・土師器が出土している。
- S X10** 調査地中央部の上段水田の水田盛土下面で検出した。長さ2.3m、幅1.5mの長方形の落ち込みである。落ち込みの東側は一段深く、一辺1.5m、深さ45cmで方形に掘り込まれている。掘形の壁体はほぼ垂直に掘られ、掘形の底はほぼ平坦である。
- 方形掘形の上層は、石材が三層に敷かれたように置かれ、下層は地山掘削土を埋めて充填している。西側は、ステップ状に平坦面をつくり、掘形の壁体は緩やかにたちあがっている。
- S X11** 調査地中央部の上段水田の半ばに位置する。直径1.3m、深さ55cmの円形の落ち込みである。落ち込みの底部は平坦で、灰色粘性砂質土が水平に堆積している。この上面には、30cm大の角礫と河原石が投げ込まれたように堆積している。落ち込みの底部・周壁からの湧水が激しく、井戸であった可能性も考えられるが、井戸枠等の痕跡はなく、遺構の性格は不明である。上層埋土内からは陶磁器・須恵器・土師器片が出土している。
- 耕作溝** 水田の畦畔の下端で検出した幅15~30cm前後、深さ10cm前後の溝である。埋土は灰褐色粘性砂質土で、須恵器・土師器片が含まれている。
- S D03~07** 畦畔下での排水・用水用の溝であった可能性が高く、S D01よりも上層から掘り込まれている。また、掘立柱建物址の柱掘形はすべてこの溝によって切られた状態で検出された。
- 流路 1** 調査地南部を東西に流れる自然流路と考えられる。幅2~3m、深さは最深部で60cmである。この自然流路は近世の落ち込みであるS X02・06・08の上層部を削平して流れている。調査地東端で「八」の字形に広がり谷に落ち込んでいる。埋土は小礫を含む灰色砂質土で、須恵器・土師器片が比較的多く含まれていた。



fig. 363 S X10近景（東から）

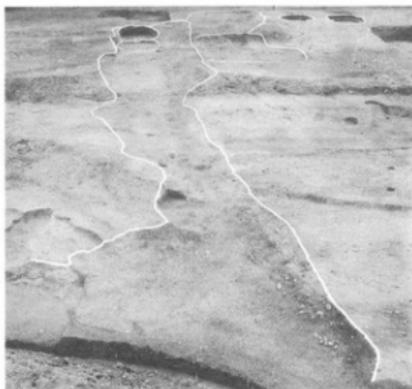


fig. 364 流路 1全景（東から）

流路 2

調査地北部を東西に流れる自然流路と考えられる。流路の西側の丘陵内には小さな谷地形を利用した溜池があり、古くから湧水があったと考えられる。流路の中央には流路が埋まつた後に S E 01が掘られている。

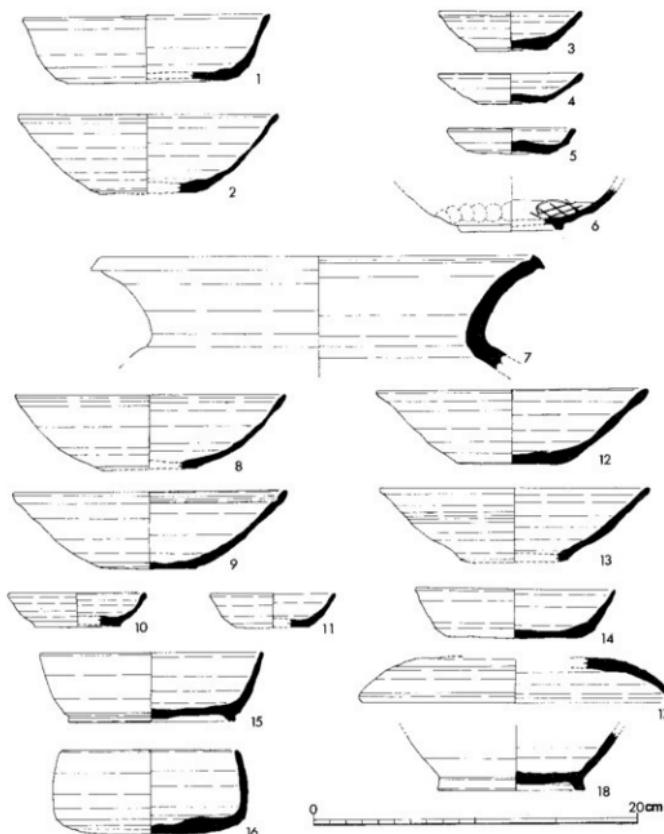


fig. 365 出土遺物実測図

- | | | | |
|--------|--------|-----------|--------|
| 1 | 柱穴45 | 2 ~ 4 · 6 | S B 02 |
| 5 | 柱穴60 | 7 | S B 01 |
| 8 · 12 | 耕作溝 | 9 ~ 11 | 流路 1 |
| 13 | S D 02 | 14 ~ 18 | 包含層 |

S E 01

調査地北部東端で検出した流路 2 の上層から掘られた井戸である。一辺1.5~1.7mの隅円方形の掘形を検出面から90cmまで掘り下げた後、以下を一辺1.0mの隅円方形に段掘りしてロート状に掘っている。深さは検出面より2.3mである。井戸の底は不整形で、径80cmである。中段の部分には自然木を横木にした枠状の構造物があり、素掘りながらも造作が行われている。S E 01は、自然流路上に営まれた素掘りの井戸であり、この西側の丘陵上には谷地形を利用した溜池があることから、農業用水をこの地下水に求めていたと考えられる。井戸埋土内からは瓦・陶磁器が出土している。

3.まとめ

今回の宅原遺跡宮ノ元地区の調査では、掘立柱建物址 3棟、火葬墓 1基、落ち込み10基、井戸 1基を検出した。

掘立柱建物址の前後関係

掘立柱建物址は、調査地南東部の最も低い遺構面で重複した状態で検出された。S B 02 の南梁間柱の掘形は S B 01の束柱掘形を切り込んで掘られており、S B 02は S B 01の廃棄後建築されたと推定される。また、S B 02と S B 03は共に小型円形の掘形を掘り、同一方位の柱並びを探る点などから、ほぼ同時期に建てられたと推定される。したがって、S B 01から S B 02・S B 03への時期変遷が窺える。

掘立柱建物址の時期

S B 01の柱掘形内からは、須恵器の甕の口縁部片が出土している。この甕の形態および方形の柱掘形を掘って構築している点などから、奈良時代に遡る可能性がある。小規模な 2 棟の建物柱掘形からは、須恵器・土師器片が出土しているが、いずれも細片で時期を比定できる資料はない。S B 02・03と同様な小型円形の掘形底から須恵器小皿が出土している。この須恵器小皿から推定して、13世紀後半~14世紀前半に 2 棟ともそう時間を置かず構築されたものと考えられる。

掘立柱建物址のうち、S B 01は規模の大きい総柱の建物であり、宅原遺跡内でその規模において屈指の掘立柱建物址の発見であった。また、S B 01の立地が傾斜面にあり、何らかの宅地造成による切り土・盛土があったことが想定される。そして、丘陵側に「コ」字形の排水施設をつくる点など、当地域における掘立柱建物造営技術を考えるうえで重要な資料を提供するものと考えられる。

一方、近世後期の落ち込み10基は、4基単位に並列し、その間隔も 4 m の等間隔に並ぶことなどから近世墓ではないかと推定されるが、近在に墓地が存在した伝承はないため、性格不明遺構とした。

28. 龍ヶ坪遺跡 第2次調査

1. 調査の経過

今回の調査地の西側において、昭和61年度に六甲北有料道路の建設に伴う龍ヶ坪遺跡第1次調査が実施された。この調査では、平安時代中期（10世紀前半）の掘立柱建物址などの集落址が調査され、また、縄文時代の石器製作址も調査されている。

そして、市道長尾線がこの六甲北有料道路の高架下を通ることが計画されたため、平成2年度に路線内の試掘調査を実施した。その結果、今年度工事予定部分である善入川橋脚部分周辺に、埋蔵文化財が存在していることが明らかになった。

以上のような経緯のもとで、今年度は善入川橋脚部分および市道長尾線の路線の一部について発掘調査を実施した。しかし、試掘調査を実施したところ以外に遺物包含層の拡がりが一部認められ、部分的に追加調査を行ったため、善入川河川改修区へも一部調査範囲を拡げて調査を実施した。しかし、この部分の本格的な調査は、後日兵庫県教育委員会が実施している。



2. 調査の概要 基本層序は第1層が現耕土層、第2層が末土層で第3層が遺物包含層になっている。第4層は黄色粘土層～暗灰色粘土層で、この第4層上面において遺構が検出された。第4層以下については断ち割り調査を行ったが、遺物、遺構などはまったく検出されなかった。

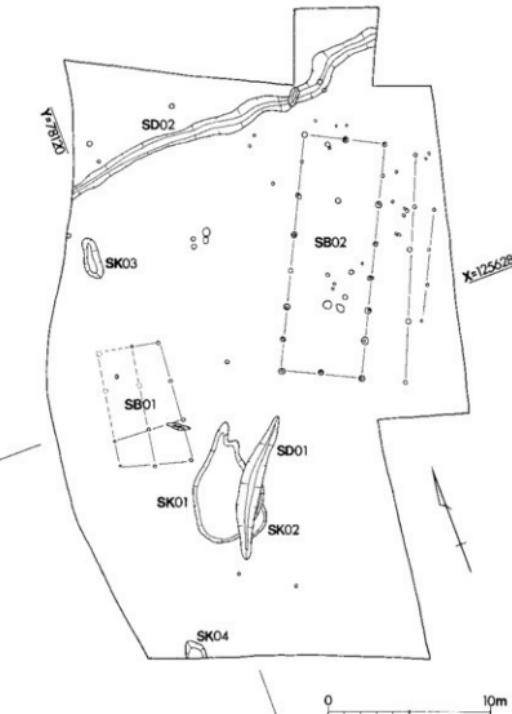


fig. 367 遺構平面図

遺構

遺構は調査地内の北側を中心にして検出されており、南側については遺構は希薄であった。今回の調査では、縄文時代にさかのぼる可能性のあるような遺構は検出されなかつたが、石礫が2点とサスカイトフレーク数点が出土しており、縄文時代の生活域が付近に存在していた可能性を示している。

主要な遺構は掘立柱建物址2棟、溝状遺構2条、土坑3基、ピット・柱穴多数である。

(1)掘立柱建物址 SB01は調査区ほぼ中央部で確認されたが、西～東側へ向かって傾斜しているために、S B01の西側では水田造成の際に大きく削平を受けており、柱穴の遺存状況は良好なものではなかった。そのため、建物の規模については明確にできなかった。現状では南北3間・東西2間が認められているのみである。柱並びも良好なものではなく、柱間距離も一定していない。時期については、これらの柱穴から遺物はほとんど出土しておらず、特定することは困難であるが、わずかに出土した遺物からは、平安時代前半（9～10世紀）の範疇に収まるものと考えられる。



fig. 368 調査区全景

S B 02

S B 02は調査区の北西部で検出されたもので、東西2間・南北7間である。柱穴は比較的良好に遺存していた。S B 01と比較してやや大きな柱掘形を持っており、大きいものでは約50cmの規模である。そのため、柱直径も大きく約20cmである。柱穴内に拳大の石を詰めているものや、根石の可能性のある平坦な石を据えているものもあった。

柱穴内からの遺物の出土は少なかったが、北東隅の柱穴内にはほぼ完形の須恵器の杯身が置かれたような状況で出土している。地鎮など、何らかの祭祀に関連するような遺構の可能性が高いものと推定される。

これらの遺物からこの建物の時期は、平安時代前半（9世紀前半）頃の建物であったと推定される。

この建物の東側にピットが2列、ほぼ建物に沿うように並ぶように検出されており、この建物に伴う柵列であった可能性もある。

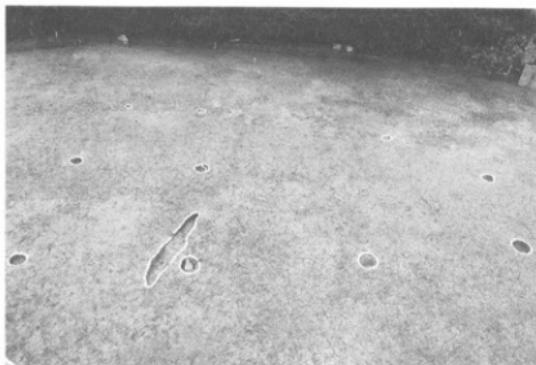


fig. 369 S B 01全景 (東から)

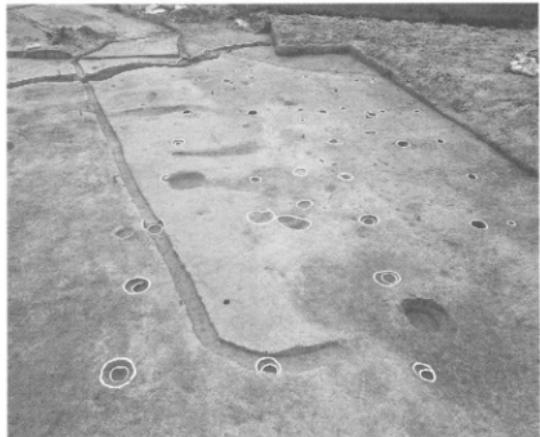


fig. 370 S B 02全景（南から）

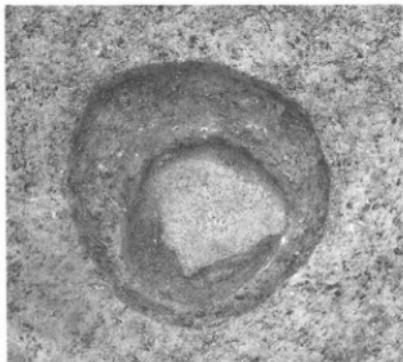


fig. 371 S B 02柱穴内根石出土状況



fig. 372 S B 02柱穴内遺物出土状況

(2)溝

S D 01 S D 01は土坑SK 01を切る溝である。最大幅1.2m、深さ20cm、長さ9.5mである。出土遺物は少なく、その時期を確定できないが、出土した土器の小片は概ね平安時代の前半に収まるものと考えられる。

S D 02

S D 02は調査地の北側を西から東へ横断するように検出された溝である。幅1.4m、深さ40cm、検出長21mである。この溝から北側では遺構は希薄であることから、集落を区画する溝であったことも考えられる。

(3)土坑

遺物は溝内の東側で比較的まとまって出土している。これらの遺物は須恵器の壺身を中心としている。これらは平安時代前半（9世紀前半～中頃）の遺物群で、溝もその時期のものと考えられる。また、漆で亀裂を補修した痕跡のある須恵器の壺も1点出土している。

土坑は3基確認されているが、いずれも浅いもので遺物も少なく、その時期については確定できないが、概ね平安時代前半までの時期に属する遺構であると推定される。



fig. 373 S D 01とS K 01・02（東から）



fig. 374 S D 02全景（西から）



fig. 375 S D 02遺物出土状況



fig. 376 S D 02遺物出土状況

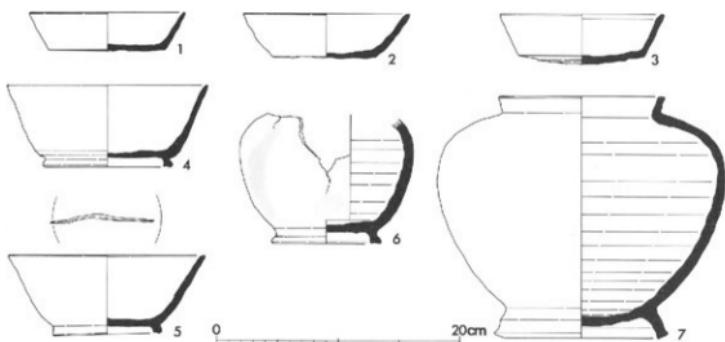


fig. 377 S D 02出土遺物実測図

S K01

S K01は溝S D01に切られる長径6.5m、短径4.0m、深さ15cmの不整形の土坑である。出土遺物は少なく、その時期を確定できないが、平安時代の前半（9世紀中頃）に取まる遺物が出土している。

3.まとめ

今回の調査は、昭和61年度の調査に引き続き、平安時代前半を中心とする集落の調査を行った。平安時代の掘立柱建物址は、今回の2棟と第1次調査の平安時代中期の3棟を合わせて計5棟となった。善入川左岸地域の圃場整備事業に伴う試掘調査では、遺構・遺物の出土は顕著ではなく、埋蔵文化財の確認されているのはわずかにこの周辺のみである。また、時期的にも一部縄文時代に遡る可能性のある遺構・遺物が認められるものの、主体は平安時代前半～中頃（9～10世紀）であり、極めて短期間に営まれた遺跡であったと言えよう。このことは出土した遺物量の少なさからもうかがわれる。

狭小な谷部の中、この時期にこのような集落が営まれていたことは極めて注目すべきことである。出土遺物の中には、須恵器では焼け歪みのあるものや焼成のやや甘いものが見受けられ、近辺に須恵器窯が存在した可能性もある。示唆的な地名が向側の谷に残っており、土器谷（かわらけだに）と呼ばれている。この集落はこれに関わる人々の集落であった可能性も考えられる。



fig.378 調査地区遠景（西から）

29. 上津遺跡

1. はじめに

今回の調査は県道山田・三田線の改良工事に伴うものである。調査場所は武庫川の支流長野川がさらに支流となる善入川沿いにあたる。

周辺の遺跡として知られているのは、善入川が長野川に合流する辺りに中世山城の茶臼山城が存在する。茶臼山城から約1km南の小丘陵では、平安時代の掘立柱建物4棟、土坑、縄文時代の石鎚、多くのサスカイト・チャートのチップが出土し、石器工房址の可能性が考えられている龍ヶ坪遺跡が存在する。また、東側に位置する宅原遺跡群は縄文時代から中世にかけての大複合遺跡として知られている。

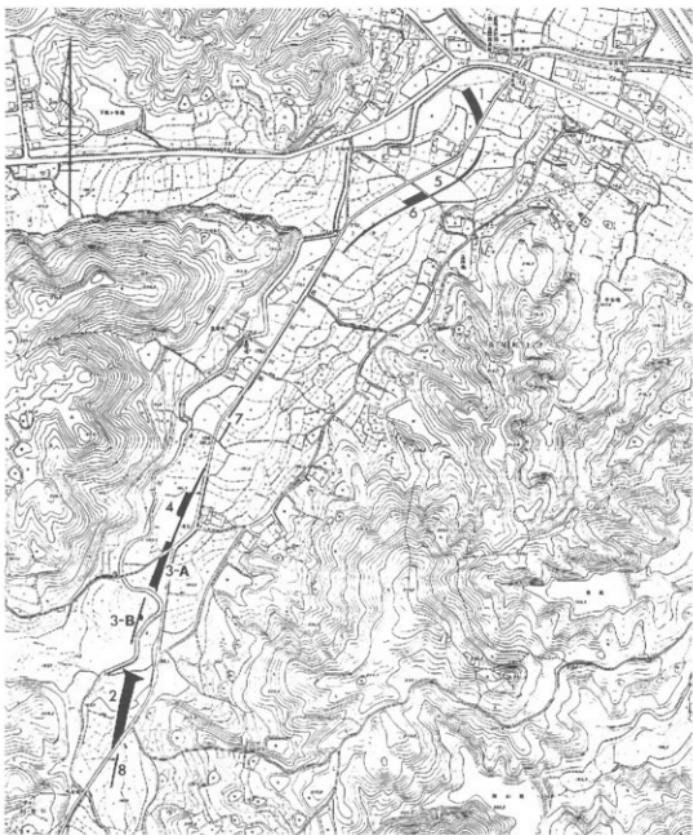


fig. 379 調査地点とトレーニングの配置 1:7000

2. 調査の概要　　調査は山田・三田線の計画路線の内、調査可能箇所を順次行うことになり、調査に着手した順に適宜トレンチ番号を付して行った。

第1トレンチ　　第1トレンチの基本層序は現代水田耕作土下、近世以降の水田耕作土を除去すると白黄色シルト質極細砂層（地山）の遺構面となる。遺構は掘立柱建物址1棟、土坑3基、溝2条、数十基のビットである。

S B01　　掘立柱建物址は南北4間（9.1m）、東西2間（5.2m）以上の総柱である。柱間は南北方向が2.4m前後、東西方向が東から2.4～2.8mと不揃いであり、ビットの規模は直径25cm前後である。ビットの中からは須恵器や土師器の細片数点が出土した。この遺物から時期を決定するならば13世紀の掘立柱建物であると考えられる。

S K01　　S K01は調査区外に延びるため、全体の規模を捉えることはできなかったが、短径8.5m、長径9m以上、深さ47cmの楕円形の土坑である。土坑は緩やかな傾斜をもって底になり、埋土は灰褐色系のシルト～砂質土層であった。土坑からの遺物の出土はなく、時期は不明である。形状や埋土の様子から判断すると、池状の水溜まりのようなものであったと考えられる。



- S K 02** S K 02は平面形が不整形の土坑で長径1.4m、短径80cm、深さ27cmである。埋土からは中世の須恵器、土師器の細片が出土した。いずれも中世のものと思われるが、詳細な時期は不明である。
- S K 03** S K 03は調査区外に延びるため、全体の規模を捉えることはできない。短径2.7m、長径3.4m以上、深さ10cmの浅い落ち込みである。土坑からの出土遺物はなく、時期の決定はできないが、土層の観察から近世以降のものと思われる。
- S D 01・02** S D 01は最大幅58cm、深さ27cmで、断面が「V」字形の溝である。若干「く」字形に曲がり、S K 01に取りついている。S D 02は最大幅32cm、深さ10cmの溝で、南北方向に走る。溝からの出土遺物はなかった。
- 第1トレンチの北端部については、善入川の氾濫によりすでに遺構面は失われていた。また、第1トレンチの南端部については遺構面が存在せず、湿地状の地形で、中世以降には水田として利用されていたと考えられるものの、水田畦畔は確認できなかった。
- 第2トレンチ** 第2トレンチは善入川の中流域にあたる。調査区は、中央付近の現水路を境にして高低差があり、便宜的に現水路の北側をA地区、南側をB地区とした。第2トレンチA地区的基本層序は現代水田耕作土層、近世以降の水田耕作土層、中世水田層となる。
- 中世水田** 調査区の中では水田畦畔が2条検出され、いずれも調査区を横切るような東西方向の畦畔であった。畦畔の幅は1.3m、高さ16cmのしっかりしたもので、検出された畦畔は2条とも若干のずれはあるものの、現代水田の畦畔および近世以降の水田畦畔と位置を同じくする。中世以降の水田造作では、このように埋没水田の畦畔と同じ位置に水田畦畔を構築することが知られている。
- 水田畦畔からは須恵器、土師器の細片が少量出土しており、遺物から判断すると水田の時期は13世紀以降と考えられる。
- B地区** 第2トレンチB地区はA地区より約1m高くなっている。基本層序は現代水田耕作土層、近世以降の水田耕作土層、黄褐色砂質土層（地山）となる。トレンチの東側約半分は、現代水田耕作土の直下で軟岩質の地山面となった。遺物包含層、遺構は存在しなかった。



fig. 383 第2トレンチA地区水田畦畔（北西から）

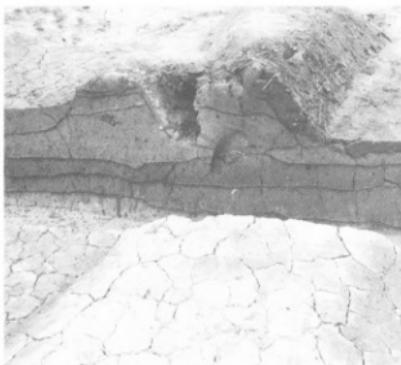


fig. 384 第2トレンチA地区水田畦畔断面

第3トレンチ 第3トレンチは市道長尾線の計画路線をはさんで、第2トレンチの北側に位置する調査区で、道路路線内を善入川が流れている。そのため、遺構の存在を確認するための試掘トレンチを設定して調査を行った。調査区を便宜的に善入川がトレンチを横断する北側をA地区、南側をB地区とした。

A地区 A地区は計画路線の東端に試掘トレンチを設定して遺構の確認を行ったところ、土坑が確認できたので、調査区を全域に拡げて調査を続けた。その結果、土坑3基、ピット4基が検出された。

SK01 SK01は長径1.3m、短径78cm、深さ38cmの橢円形の土坑である。土坑埋土からは縄文時代中期末の北白川C式に比定される深鉢形土器の口縁部や底部片が出土した。また、サスカイト製の石鏃7個体分（製品6点内4点が破損、未製品1点）とチャートの石核1点

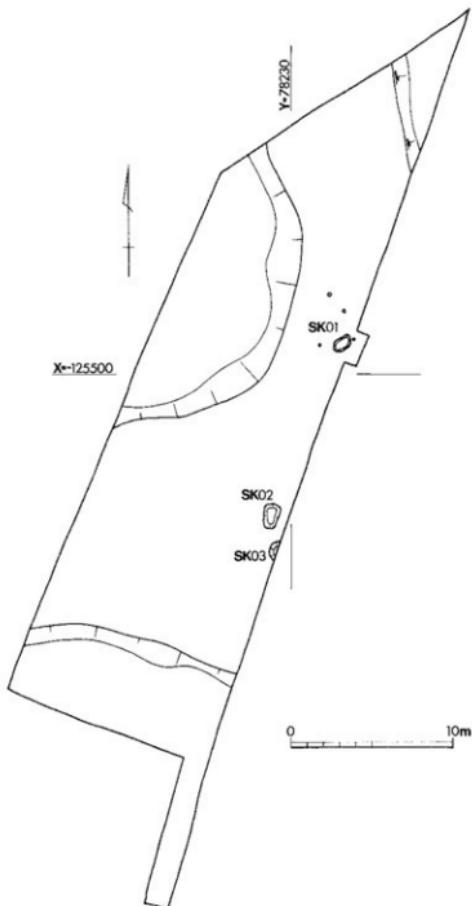


fig. 385 第3トレンチA地区平面図

が出土している。土坑埋土の水洗選別を行ったところ、サヌカイトのチップ18.65g、結晶片岩のチップ11.1gが確認された。結晶片岩は石棒製作の可能性を示すものと考えられるが、その利用目的は不明である。

・SK01の周辺でピットが4基確認された。直径約25cm、深さは約3cmで、浅いピットである。土坑とピットとの関係は明らかにはできなかった。

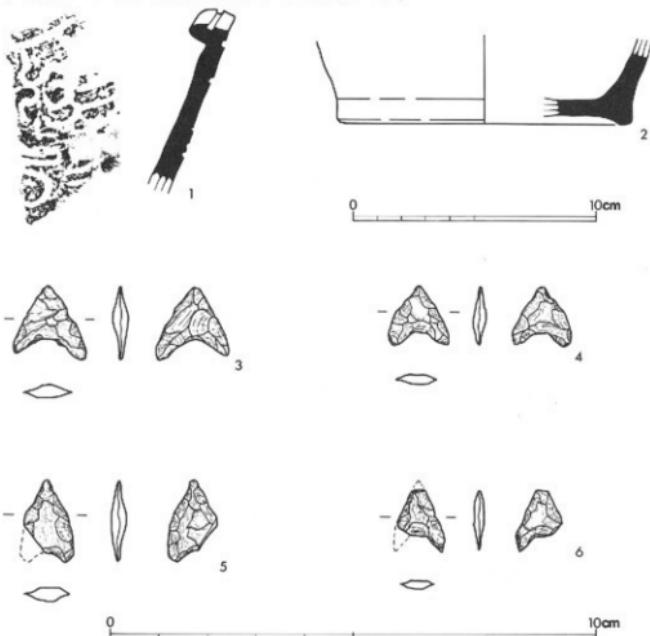


fig.386
第3トレンチA地区
区SK01出土遺
物実測図



fig.387 第3トレンチA地区全景（南から）



fig.388 SK01とピット（南西から）

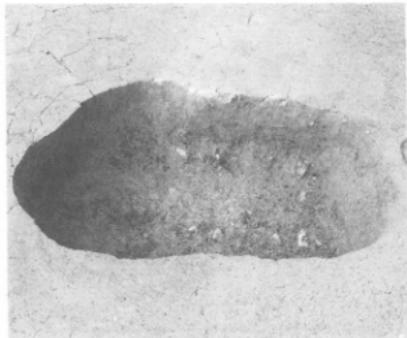


fig. 389 SK01近景（南東から）

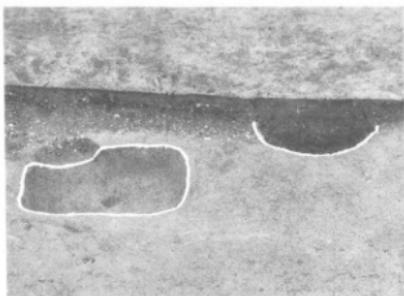


fig. 390 SK02・03近景（西から）

SK02・03 SK02は長径1.52m、短径93cm、深さ34cmの隅円長方形の土坑である。検出当初、木棺墓の可能性が考えられたが、木棺、副葬品等の出土ではなく、埋土の観察からも、木棺墓ではなかった。SK03は、調査区外に延びるため、全体の規模を確認することはできなかつたが、直径1.1mの円形の土坑であると思われる。SK02・03からの遺物の出土ではなく、その時期を決定することはできない。

B地区 B地区は幅2m、全長69mの試掘トレンチを計画路線の西端に設定し、一部トレンチの拡張を行った。また計画路線の東端に試掘坑を1箇所設定した。調査の結果、遺物包含層・遺構は存在せず、近世以降の水田経営が現代まで行われていることが判った。

第4トレンチ 第4トレンチは第3トレンチの北側に位置し、第3トレンチと同様にトレンチ調査を先行させた。遺物包含層あるいは遺構の確認された範囲に関して調査区を拡げる調査方法を採った。トレンチは便宜的に現地形によって3地区に分け、北側よりA・B・C地区とした。

A地区 A地区は幅1.5m、全長44mの試掘トレンチを計画路線の東端に設定した。調査の結果、近世以降の水田が現代まで使われていることが判った。

B地区 B地区もA地区と同様にトレンチ調査を先行したところ、遺構面の存在する箇所が確認されたため、トレンチを計画路線範囲に拡げて調査を続行した。

SD01 B地区で検出された遺構は溝2条である。SD01は長さ19.79m、最大幅1.38m、最大深20cmで、底は南から北に向かってわずかに低くなる。埋土の観察から、溝はある時期に一部掘り直していることがわかった。埋土からは須恵器、土師器の小片が極少量出土している。出土遺物から時期決定は困難であるが、13世紀頃のものであると思われる。

SD02 SD02はSD01の西側に平行して検出された溝である。長さ6m、最大幅1.4m、最大深26cmで、SD01とは逆に北から南に向かって底が低くなる。遺物の出土はなく、時期は不明である。埋土の様子はSD01とは異なり、流れの方向も相違するので、同時期の存在ではないと考えられる。

B地区的南側は緩やかに南に傾斜して、湿地状の地形となる。

C地区 C地区はB地区的南に位置するトレンチで、調査方法はトレンチ調査を先行させて行っ



fig.391 第4トレンチB地区全景（南東から）

た。その結果、第3トレンチの続きである遺構面はC地区南側には存在するものの、北側は湿地状の地形がB地区に続く。C地区からは遺構は検出されなかった。

第5トレンチ 第5トレンチは第1トレンチの南側に位置する調査区で、計画路線の東端の尾根際に全長79mのトレンチを設定して行った。調査の結果、中世の遺物が極少量出土したが、遺構面は存在しなかった。

第6トレンチ 第6トレンチは第5トレンチの南側に位置する全長147mのトレンチである。現地形から判断して、遺構の存在する可能性のある範囲については、計画路線幅にトレンチを拡張して調査を行った。調査の結果、第5トレンチ同様に遺構面は存在せず、遺物が極少量出土した。

第7トレンチ 第7トレンチは第4トレンチの北側に位置する全長70mのトレンチである。調査の結果、第5トレンチ同様に遺構面は存在せず、遺物が極少量出土した。

第8トレンチ 第8トレンチは第2トレンチの南側に位置する全長50mのトレンチである。調査の結果、第5トレンチ同様に遺構面は存在せず、遺物が極少量出土した。

3.まとめ 第3トレンチで縄文時代中期の土坑が検出され、縄文時代の集落が周辺の尾根際に存在する可能性を高めた。また、龍ヶ坪遺跡の調査では、縄文時代と思われる石器が多く出土していたが、時期を判断する遺物がなく、今回の土坑の検出は龍ヶ坪遺跡との関連からも意義あるものと言える。

周辺ではこれまでに縄文時代後期の土器が宅原遺跡内壇地区で確認されているが、中期に遡る土器と遺構は今回が初めてである。

また、第1トレンチで掘立柱建物址が検出され、中世の集落の存在が確認された。第1トレンチの掘立柱建物址は、第1トレンチの南側の尾根に続く集落と考えるよりも、第1トレンチ西側の尾根から派生する微高地に存在する集落であると思われる。

他のトレンチで検出された遺構は善入川に沿って点在する微高地の安定した高台にあたるものと思われる。それ以外の地域は低湿地状の地形で、水田としての土地利用がされていたものと考えられる。

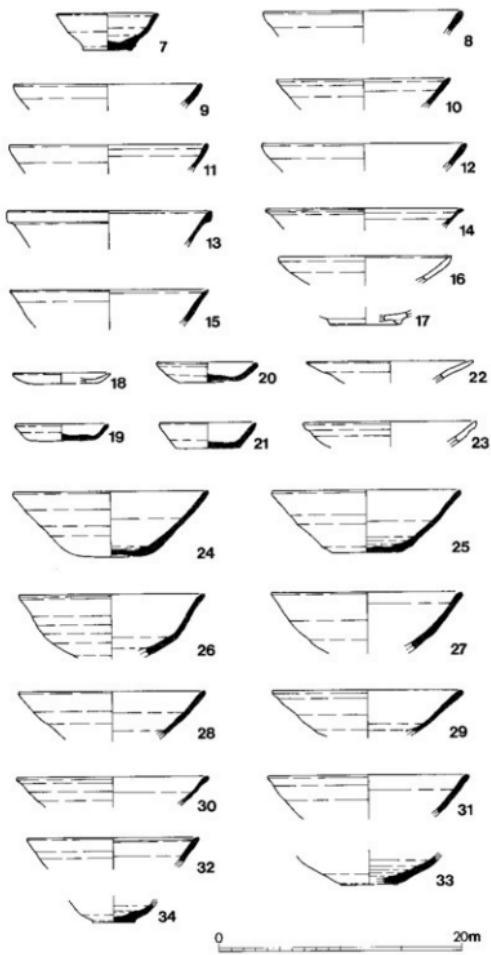


fig.392 第1トレンチ出土遺物実測図

7 : B 地区 SB 01

8・9 : B 地区 ピット 2

10~12 : B 地区 SK 02

13~34: 包含層

30. 上津遺跡

1. はじめに

上津遺跡は長尾川の南岸と、善入川に形成された小谷に挟まれた沖積地から尾根端部にかけて広がる遺跡である。西脇三田線建設に伴う昭和60年度の調査では、鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物址などが確認されている。

当調査区域内は、昭和58年度以降実施されている県営長尾圃場整備事業に伴い、平成2年度に試掘調査が実施されている。その結果、中世の遺物と共に遺構が多数確認されたため、排水路とパイプラインとなる部分の調査を実施した。調査の結果、主な遺構では旧耕土直下の遺構面から掘立柱建物址2棟と共に木棺墓、柵列、土坑、ピットなどを確認している。

2. 調査の概要

今回の調査地域内は、近世以降の水田開発による削平を受けているため、明確な遺物包含層は確認されていないが、淡灰色砂質土（中世～近世の遺物を含む旧耕土）直下の遺構面から9世紀、12世紀～14世紀と考えられる遺構が確認されている。

時期の明らかな遺構の大部分は、丘陵から延びる尾根の末端部から善入川東岸の段丘上に集中しており、調査区のほぼ西側半分は氾濫原にかかっている。



fig. 393
調査地点の位置
1:2500

1区

近世以降の水田開発による削平を受けている。この削平を比較的まぬがれた調査区の西端部分では、淡灰色砂質土（旧耕土）直下の遺構面から土坑、ピット、溝が確認された。溝は淡灰色砂質土（旧耕土）が埋土で、近世以降のものであろう。

土坑は灰褐色砂質土が埋土であり、ピットは褐色混じり淡灰色砂質土が埋土である。遺物は確認されず遺構の存続時期は不明である。

2区

調査の結果、谷の中央へ向かう急斜面が確認された。遺構は確認されていない。遺物は斜面を覆う淡灰色砂混じりシルト～灰色砂混じりシルトから時期不明の下駄が1点確認されている。

3区

丘陵から延びる尾根の末端部に広がる平地面に設定された。淡灰色砂質土（旧耕土）直下の遺構面から遺構が多数確認されている。遺物の出土はわずかであり、遺構の時期は不明である。

遺構は、淡灰色砂質土（旧耕土）が埋土で現況の水田と平行または直行する溝数条と灰色砂質土を埋土の溝を除き、灰褐色砂質土、褐色混じり淡灰色砂質土を埋土としている。

ピット01

平面形が不整円形で、幅約55cm、深さ約8cmのピットである。炭混じりの灰褐色砂質土が埋土である。遺物は土師器の細片が確認されている。

ピット02

平面形が不整円形で径約60cm、深さ約28cmのピットである。炭を含む灰褐色砂質土が埋土で、遺構内からは約10～15cmの焼け石が多数確認されている。遺物の出土は確認されていない。

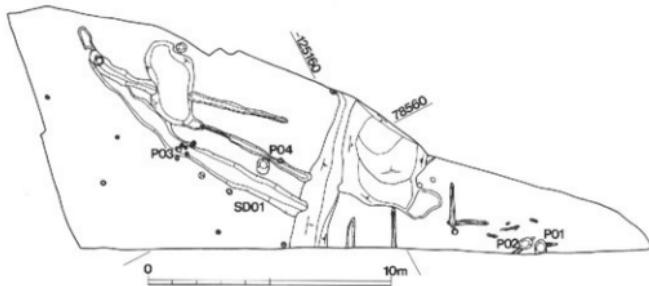


fig. 394 3区平面図



fig. 395 1区全景（東から）



fig. 396 3区全景（北から）

SD01 幅約70cm、深さ約13cmの東西方向に延びる溝である。遺構に堆積した灰色砂質土から須恵器、土師器の細片が出土している。

4・5区 5区は尾根の末端部に位置する敵高地上に設定されている。4区はその北端部に接して丘陵部分から善入川東岸の氾濫原に至るまで東西に細長く設定されている。

調査の結果、淡灰色砂質土（旧耕土）直下の遺構面から12世紀～14世紀までと考えられる掘立柱建物址2棟、木棺墓1基、柵列、杭列を伴う溝や、9世紀の遺物を含む溝を確認している。

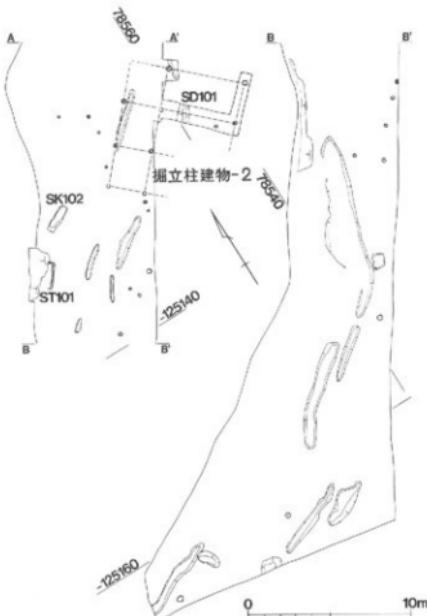


fig. 397 5区南半平面図



fig. 398 5区全景 (南から)



fig. 399 5区全景 (北から)

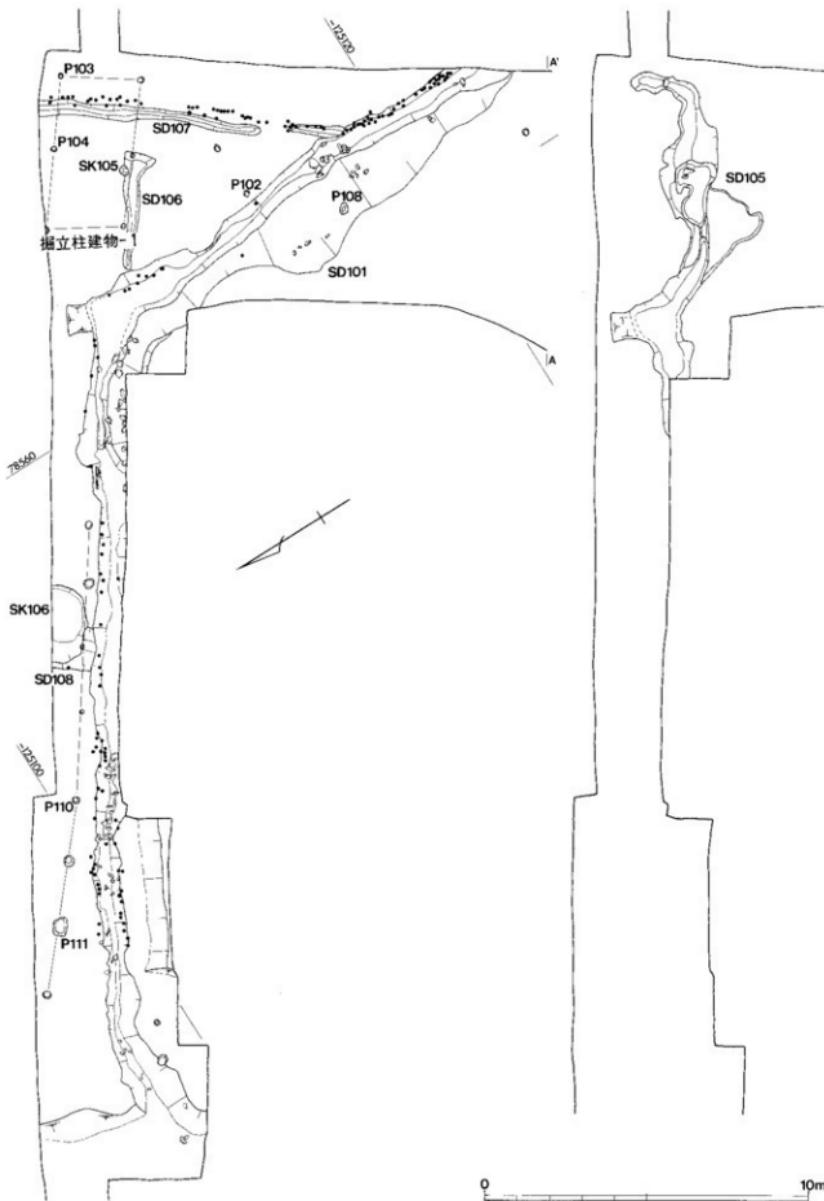


fig. 400 5区北半平面図

S T 101

5区中央の西端部付近から確認された。西半分が削平されている木棺直葬墓である。掘形は東西残存長約44cm×南北残存長約170cmであり、木棺の痕跡が東西残存長約32cm×南北約162cmである。現存する深さは約15cmである。

出土遺物は、木棺内北端付近のはば中央部分から木棺の長辺にはば平行して1列にならび、白磁碗1、白磁皿1、須恵器碗1、土師器小皿3の計6点を確認している。検出された状態では白磁皿の上面に白磁碗を重ね、その北側に添って須恵器碗が確認された。土師器小皿は2点が重ねられて須恵器碗の北側に、1点が同じく須恵器碗の南側に添って確認された。これらの遺物は木棺内の底部にはば接しており、一見置かれたような状態で確認されている。このため棺内遺物の可能性が高いが、棺蓋上面に置かれた遺物が落ち込んだ可能性も否定はできない。削平が激しく底部付近のみ遺存している状態であり、詳細は不明である。遺構の時期は、出土遺物から13世紀前半に位置づけられる。

S K 102

S T 101の北側からやや離れて確認された幅約44cm×約176cm、深さ約16cmの長方形の土坑である。遺物は須恵器碗、土師器鍋の小片が出土している。

S D 101

4区から5区にかけて確認された。幅約110~300cm、深さ約30cmの杭列を伴う溝である。隅円方形形状の半円に巡る溝で、柵列やS T 101とほぼ同時期に存在したと考えられる。集落内で屋敷等の何らかの境界を示す溝の可能性がある。

杭列は護岸に伴う可能性が高い。杭を溝の壁面付近で地面に垂直に打ち込んだ状況が確認されている。また、板材を溝の壁面との間にかませることにより、補強していたと考え

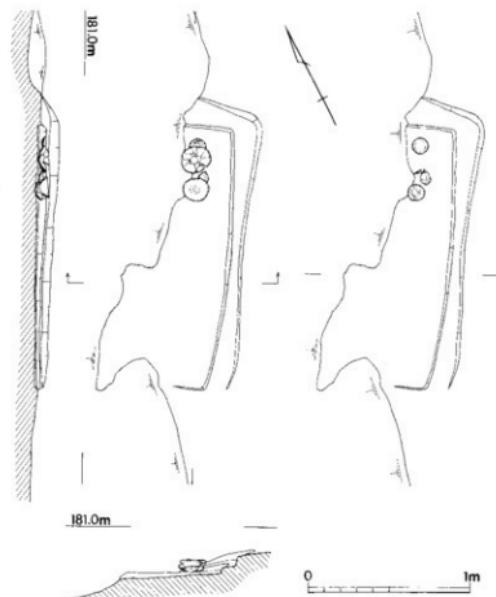


fig. 401 5区S T 101実測図

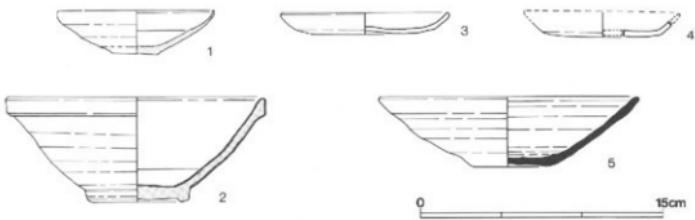


fig. 402 S T 101出土遺物実測図

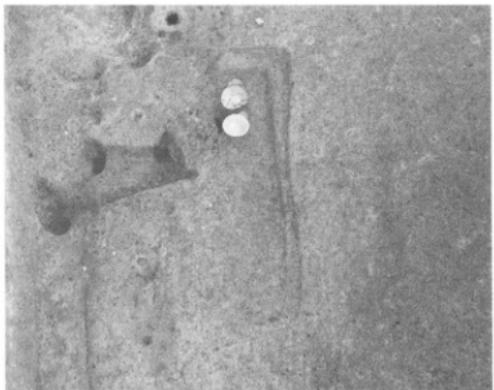


fig. 403 S T 101全景（南から）



fig. 404 S T 101遺物出土状況（西から）

られる部分も検出されている。杭のほとんどは一辺約3～5cm程度のミカン割りの角杭を使用しているが、芯持ちの角、丸杭等も使用している。

遺物は11世紀末～14世紀までの須恵器の碗、鉢等と共に土師器の鍋、羽釜、青磁碗、杓子状木製品等が出土している。須恵器には墨書き土器も2点含まれる。

溝の開始時期は、遺物の大部分が12世紀中頃～14世紀までのものであることから、12世

紀中頃以降と考えられる。溝の廃絶時期は、14世紀初頭以降の遺物が確認できないため、その前後の時期であろう。

- 柵列** 4区の西半から確認された。径約12~42cmの柱穴とピットがならび、柵列と考えられる。ピット111から12世紀後半~13世紀にかけての須恵器壺、土師器皿の小片が確認されており、柵列の時期も判断できる。出土遺物からS D101とはほぼ同時期に機能していた柵列と考えられる。S D101の北肩に添い、ほぼ平行してつくられており、この溝に伴う柵列となる可能性もある。
- S D 105** S D101に削平されているが、幅約100~180cm、深さ約15~45cmの溝である。細かく蛇行しながら延びており、S D101掘削以前に存在していた自然流路であろう。遺物はほとんど出土していないが、8世紀中頃~9世紀前半と考えられる須恵器壺のほか、土師器の大皿、製塙土器も出土している。
- S D 106** 5区北端部からS D101と直行する方向に延びる約30~50cm、深さ約14cmの溝である。須恵器、土師器が破片で確認されただけであり、S D107との遺構の前後関係は不明である。
- S D 107** 5区北端部からS D101と接合する状態で確認された幅約36cm、深さ約30cmの溝であり、東肩に沿って杭列が打ち込まれている。須恵器、土師器の細片が出土したのみであり、遺物から遺構の存続時期は不明である。おそらく掘立柱建物-1の廃絶後につくられた溝であろう。
- S D 108** 4区西半から確認された、幅約148cm、深さ約15~45cmの溝であり、S D101に削平されている。遺物は出土していない。
- S K 105** 5区北端部付近から確認された、径約88cm、深さ約35cmの不整円形の土坑である。S D106を削平している。土坑内から須恵器、土師器が破片で確認された。
- S K 106** 4区西半から確認された径約240cm、深さ約23cmの不整円形の土坑である。遺構内からは杭が出土しただけである。
- 掘立柱建物
- 1** 5区北端部から確認された掘立柱建物址である。建物が調査区外に続き、削平も受けているため、規模は不明である。



fig. 405 S D 101・106・107 (北西から)



fig. 406 掘立柱建物-2 全景 (西から)

検出した状況から東西2間以上×南北1間以上と確認された。柱間は東西220～236cm、南北244～250cmであり、柱穴は径14～18cmである。比較的小型の建物だと予想される。

遺物はピット103、ピット104から須恵器甕、土師器鍋が破片で出土している。建物の存在した時期は、出土遺物が少ないと判断しがたいが、12世紀代と考える。

掘立柱建物
—2

5区中央部から確認された掘立柱建物である。建物が調査地外に統いており、削平を受けているため、規模は不明である。

検出した状況では東西3間以上×南北3間以上の総柱の建物である。柱間は東西240～280cm、南北260～280cmであり、柱穴は径24～36cmである。

遺物はピット107、ピット112から土師器の鍋が出土している。建物が存在した時期は、出土遺物の時期編年が確定しておらず判断しがたいが、12世紀前半と考える。

6区

善入川東岸の沖積地上に設定した調査地であり、氾濫原が確認された。須恵器と土師器が出土しているが、遺構は確認されていない。



fig. 407 4区S D 101全景（西から）

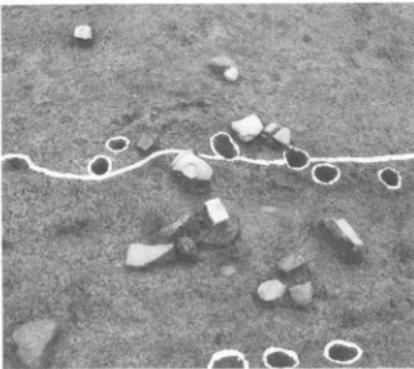


fig. 408 S D 101遺物出土状況



fig. 409 S D 101護岸杭近景



fig. 410 S D 105全景（西から）

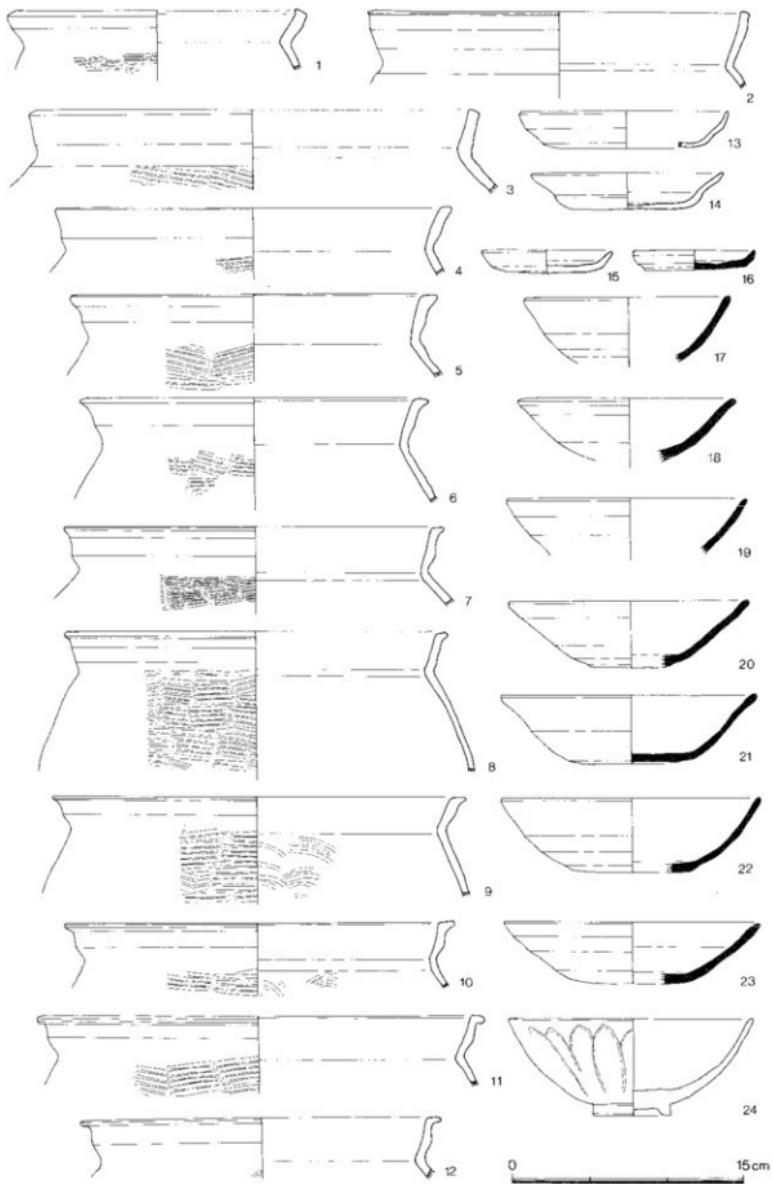


fig.411 SD 101出土遺物実測図

- 7区 調査範囲内の西端部に設定した調査区である。善入川東岸の沖積地で、氾濫源が確認された。遺構面は不安定だが、時期不明の溝を1条確認している。須恵器と土師器の破片が出土したのみである。
- 8区-1・2 丘陵の尾根から善入川の段丘上と氾濫原にかけて設定された調査区である。8区-2から溝が1条確認されているが、検出地点はすでに氾濫原にかかっている。遺物は確認されていない。

3.まとめ 昭和60年に西脇三田線建設に伴い実施された調査では、鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物址が確認されている。また、今年度の山田三田線建設に伴う調査でも、それに隣接した地域で13世紀の掘立柱建物址が確認されており、上津遺跡に中世村落が存在したことは明らかである。

今回の調査結果では、最も時期の遡る遺物として、自然流路と考えられる溝状遺構から8世紀中頃～9世紀前半の須恵器残片や、土師器大皿、製塙土器が出土している。

中世前期の集落に関係する最も時期の遡る遺構では、12世紀前半までと考えられる掘立柱建物址が検出されている。次に、12世紀後半～14世紀までの木棺直葬墓や護岸を施した溝と柵列などが確認されている。今回調査した中世集落の成立時期は淡灰色砂質土（旧耕土）からの出土遺物を含め、11世紀末から引き続き遡る遺物が確認されておらず、11世紀末に求めることも可能である。

これまでの調査結果では、長尾川と善入川の合流地点で善入川両岸の微高地から中世の掘立柱建物址などが確認されているが、今回の調査により集落が善入川に沿ってより上流方向（南方）に拡がることが確認された。掘立柱建物址などの集落に関係する遺構は、丘陵の尾根から延びる微高地上から確認されている。また調査範囲内の西側半分は善入川の氾濫原であった。

これらの事実から、上津遺跡で確認された中世集落は善入川により形成された小谷開口部からその上流域に細長く拡がり、尾根の延長上に存在する狭い微高地上に散在して営まれたと考えられる。

また、集落内で13世紀前半の木棺直葬墓が単独で確認されている。同時期の建物は今回の調査では検出されていないが、屋敷墓となる可能性が高いと考えられる。SD101が屋敷の境界を示す溝になれば、木棺直葬墓はその屋敷地内に入り屋敷墓と考えてよいことになる。これまでの調査結果から神戸市内で中世前期の屋敷墓は、宅原遺跡豊浦地区、同岡下地区、同蓮花寺地区、塩田遺跡、山田小学校校内遺跡、長田神社境内遺跡等で確認されている。

31. 淡河・中村遺跡

1. はじめに

淡河町は周囲を山に囲まれ、東西約4km、南北約600mの盆地に存在し、町の中央部を淡河川が蛇行して流れ、志染川から美嚢川、そして加古川へと注いでいる。

淡河町には、淡河城をはじめ天正寺城・萩原城の城址が、盆地を囲むように点在している。昭和51年度の淡河城址の発掘調査では、弥生時代末～古墳時代初期の竪穴住居址が検出され、昭和54年度の萩原遺跡の調査では鎌倉時代前半の掘立柱建物址3棟が検出されている。また、南側尾では、縄文時代の石器が採集されている。

こうした中で土地改良事業が計画され、昭和63年度に今回の調査地の南方約120mの地点で実施した発掘調査において、鎌倉時代頃の柱穴等を検出したことなどから、今年度工事予定地内の埋蔵文化財の試掘調査を平成2年11月13日～15日に実施した。その結果、中世の遺構面および遺物包含層を確認し、土地改良事業によって包含層および遺構面に工事の影響がおよぶ道路・排水路部分について発掘調査を実施することになった。



fig. 412 調査地点の位置 1:2500

2. 調査の概要　調査範囲は、8地点に分かれており、調査を実施した順に南東側よりA～Hトレンチと呼称した。調査の方法は、まず耕土および遺物包含層上面までを重機により掘削し、その後人力により順次掘削した。

A トレンチ 約210m²のトレンチであるが、北側を拡張して調査を実施したため、調査面積は約440m²となった。基本層序は、耕土・床土・旧耕土・床土・灰色シルト（遺物包含層）・茶褐色細砂である。現地表下約80cmで検出した茶褐色細砂層上面で遺構面を確認した。

調査区の中央部で南北に流れる溝状遺構1条を検出した。この溝状遺構を挟んで、等間隔に並ぶ柱穴5基を検出した。これらの遺構の性格を把握するために、調査区の北側を拡張して調査を実施した。その結果、この溝状遺構は逆「L」字状に東側に曲がり、調査区

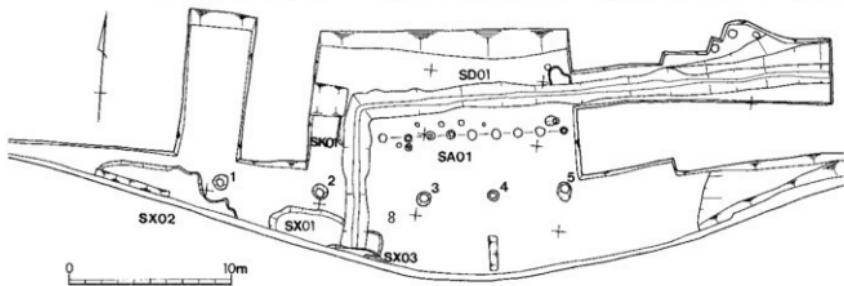


fig.413 A トレンチ平面図

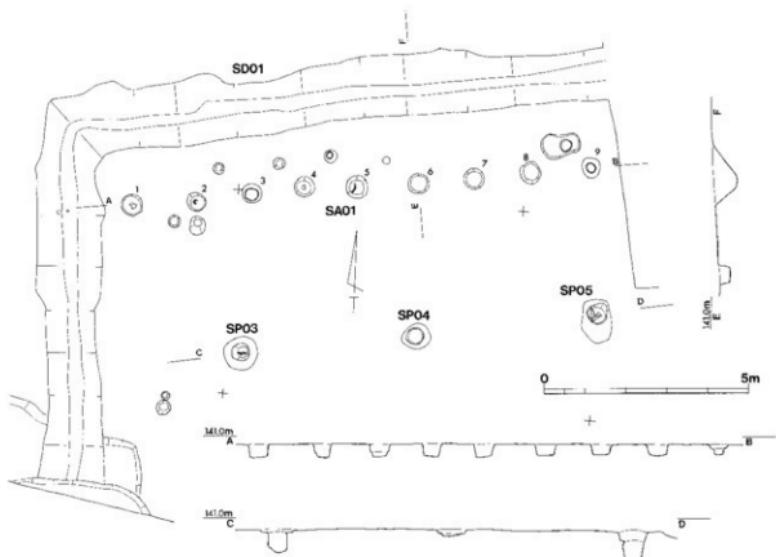


fig.414 A トレンチ SD01・SA01・SP03~05実測図

のさらに東側に延びていることを確認した。規模は、幅1.2~1.7m、深さ60cmである。埋土の灰色シルト中から、12世紀半ば頃の須恵器片・土師器片が出土した。この溝状遺構は、調査区の東半以東を区画する性格のものと思われ、内部で柵列状遺構S A01および柱穴S P03~05などを検出した。

S A01

S A01は、調査区内では9基の小穴が検出されたが、さらに東側に延びているものと思われる。S A01-1・2には竹の根の部分が遺存しており、S A01-5には木が遺存していた。

S P01~05は、円形あるいは（長）楕円形の径0.6~1mの掘形内に径40cm前後の柱痕が検出された。S P04を除き、内部には木の根と思われるものが残存していた。心々間の距離はS P01~03が各約6.5mで、S P03~05は各約4.5mではば等間隔で並んでいる。また、S P01~03とS P03~05では主軸方向には若干のずれがみられる。S P03がどちらのまとまりのなかで捉えられるのかが問題となるが、やはりS D01との位置的な関係から、S P03~05を一連のものとして考えることができよう。S D01、S A01、S P03~05は、屋敷地の一部と考えられる。S P02の埋土中より13世紀半ば頃の須恵器碗が出土している。



fig.415 Aトレーニチ全景（西から）

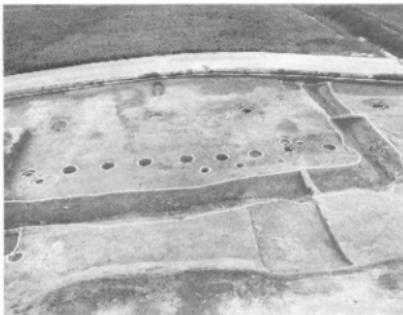


fig.416 Aトレーニチ中央部の遺構（北から）



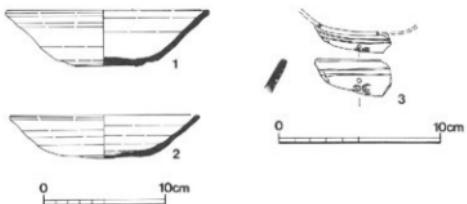
fig.417 AトレーニチS A01-1（南から）



fig.418 AトレーニチS A01-2（南から）

fig. 419 A トレンチ出土遺物実測図

- 1 SD 01
- 2 SP 02
- 3 遺物包含層



B トレンチ

水路部分に設定した全長約100mのトレンチである。中央部は東播用水の敷設時の工事で搅乱を受けており、実際に調査が実施できたのは、北部330m²と南部140m²である。北部では、土坑状遺構4基、柱穴数基等を検出したが、南部では遺構は検出されなかった。

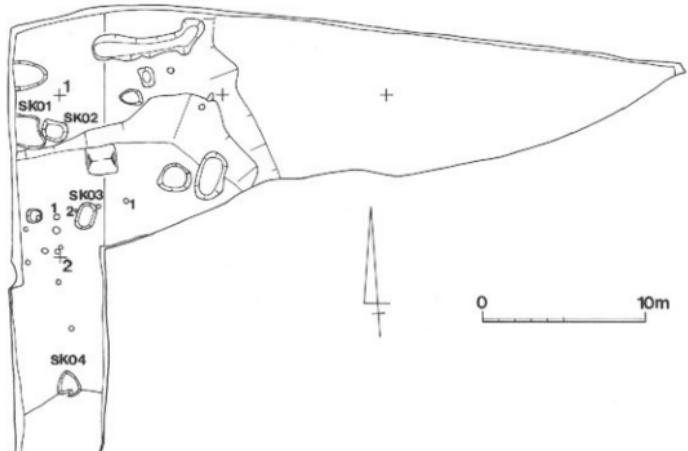


fig. 420

B トレンチ北部・
C トレンチ平面図



fig. 421 B トレンチ北端部の遺構（南から）

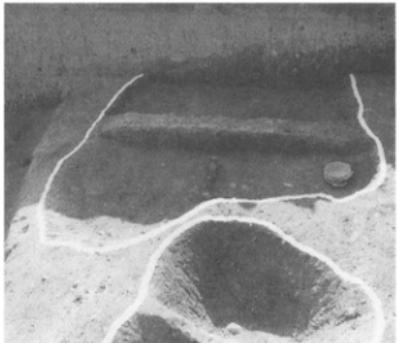


fig. 422 B トレンチSK01（東から）

- S K01** S K01は、西部が調査区外に延び、正確な規模は不明であるが、調査区内の規模は、長径2.1m、短径2.0m、深さ8cmである。埋土の灰色シルト中より12世紀後半～13世紀半ばの須恵器碗5枚が重なって出土したほか、土師器皿数枚、刀子1点等が出土した。
- S K02** S K02は、S K01のすぐ東側に接して検出した。平面形は隅円長方形で、長径1.6m、短径1.2m、深さ29cmである。埋土の灰色シルト中より土師器皿が出土した。
- S K03** S K03は、S K01・02より南にやや下がったところで検出した。平面形は長橢円形で、長径1.7m、短径1.2m、深さ54cmである。埋土の灰色シルト中より須恵器碗・小皿、土師器壺・皿が出土した。
- S K04** S K04は、長径1.6m、短径1.3m、深さ44cmである。埋土中より須恵器片、土師器片が出土しているが、いずれも小片であり、詳細は不明であるが、S K01～03と同じ時期のものと考えられる。埋土は灰色シルトである。
- S K01～03は、規模・形状・出土遺物などから、土坑墓の可能性が考えられる。また、遺物包含層中からは中国製磁器や国産陶器が比較的多く出土している。

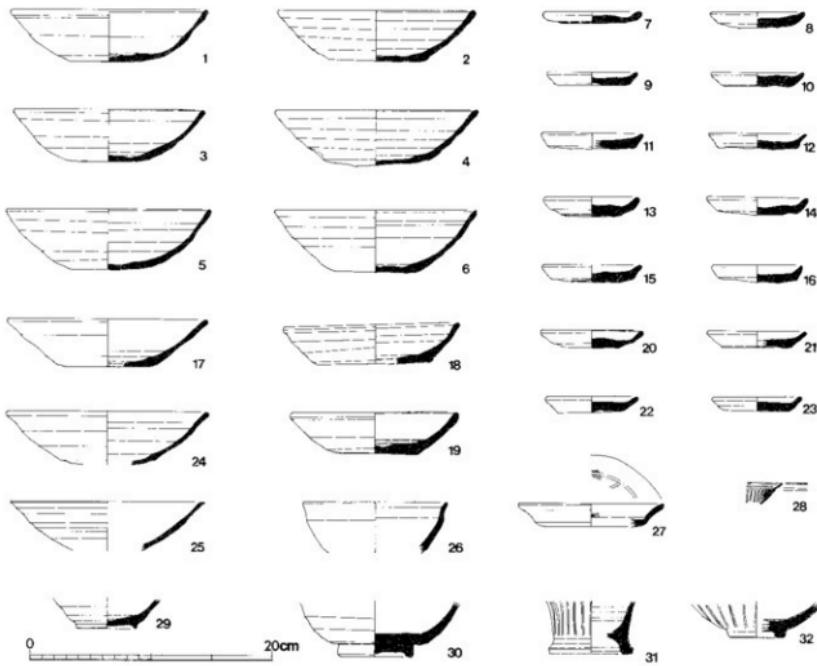


fig. 423 B トレーニー出土遺物実測図

1~13 S K01 14~16 S K02

17~23 S K03 24~32 遺物包含層



fig. 424 B ブリッジ SK 02 (東から)

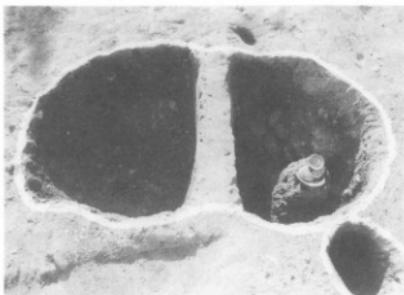


fig. 425 B ブリッジ SK 03 (南東から)

C ブリッジ

B ブリッジの北端部東側に隣接する約270m²の調査区である。遺構は西部のみで確認され、柱穴1基、溝状の落込み1基、土坑状の落込み4基等を検出した。S P01は、径30cm、深さ36cmで、埋土の暗灰色粘砂中より12世紀後半～13世紀半ばの須恵器碗や小皿の完形品等が出土している。また、土坑状の落ち込みは、遺物は出土していないものの、規模や形状などからB ブリッジ北部で検出した土坑状遺構と同様に土坑墓の可能性がある。

D ブリッジ

B ブリッジの中央部東側に隣接する約170m²の調査区で、B ブリッジ中央部と同様に東播用水建設工事によって搅乱を受けており、耕土直下は調査区の全面にわたって盛土層が検出された。調査区中央部に設定した試掘坑において耕土下約1.5mまで調査したが、この層はさらに下層まで堆積しており、埋蔵文化財は認められなかった。

E ブリッジ

B ブリッジの中央部東側に隣接する調査区で、東部を拡張したため、調査面積は約370m²である。耕土下には東播用水工事の際の盛土が約60cm堆積していたが、その下層には埋蔵文化財が存在しており、現地表下約1.4mで黄褐色砂礫層上面を基盤層とする遺構面を確認した。

検出した遺構は土坑状遺構1基で、その東側では13世紀後半～14世紀前半の須恵器片と土師器皿の完形品と炭が集中して出土した。窯などの遺構が付近に存在する可能性が考えられ、磁気探査を実施したが、それらの存在を積極的に肯定する要素は得られなかった。また、さらに東部を拡張して調査を実施したが、遺物は多数出土したものの、遺構の検出には至らなかった。

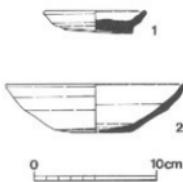


fig. 426 C ブリッジ S P01
出土遺物実測図



fig. 427 E ブリッジ全景 (東から)

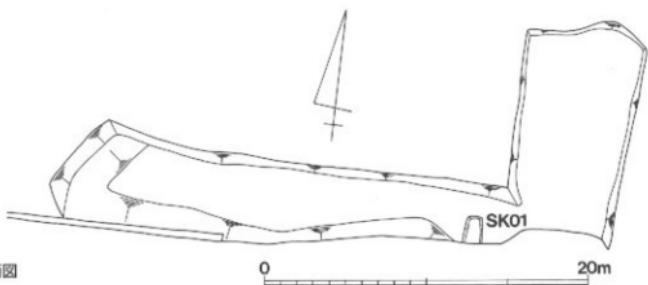
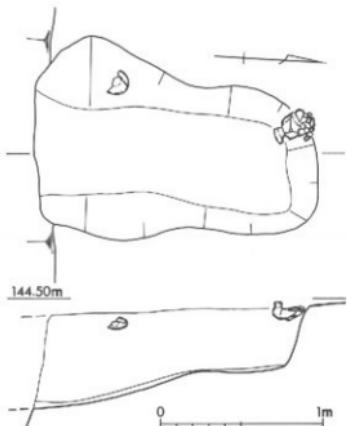


fig. 428 E トレンチ平面図



fig. 430 E トレンチ SK01全景 (北から)

fig. 429
E トレンチ
SK01
実測図



SK01

SK01は、南側が調査区外に延びる土坑で、調査区内の規模は長径1.7m、短径1.3m、深さ56cmである。平面形は、長方形に近い。埋土中より13世紀後半の須恵器碗・土師器鍋が出土している。

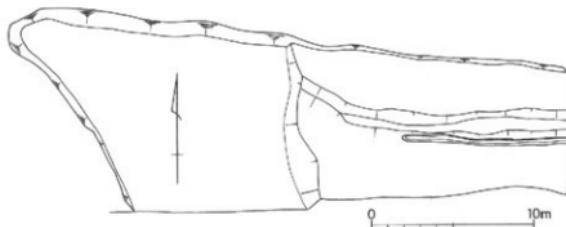


fig. 431 F トレンチ平面図

F トレンチ 今回の調査範囲の中で標高が最も高い位置にあり、約320m²の調査区である。水田の耕作に伴うと考えられる溝が検出された。15世紀頃の陶器・磁器をはじめとする遺物が比較的多く出土している。

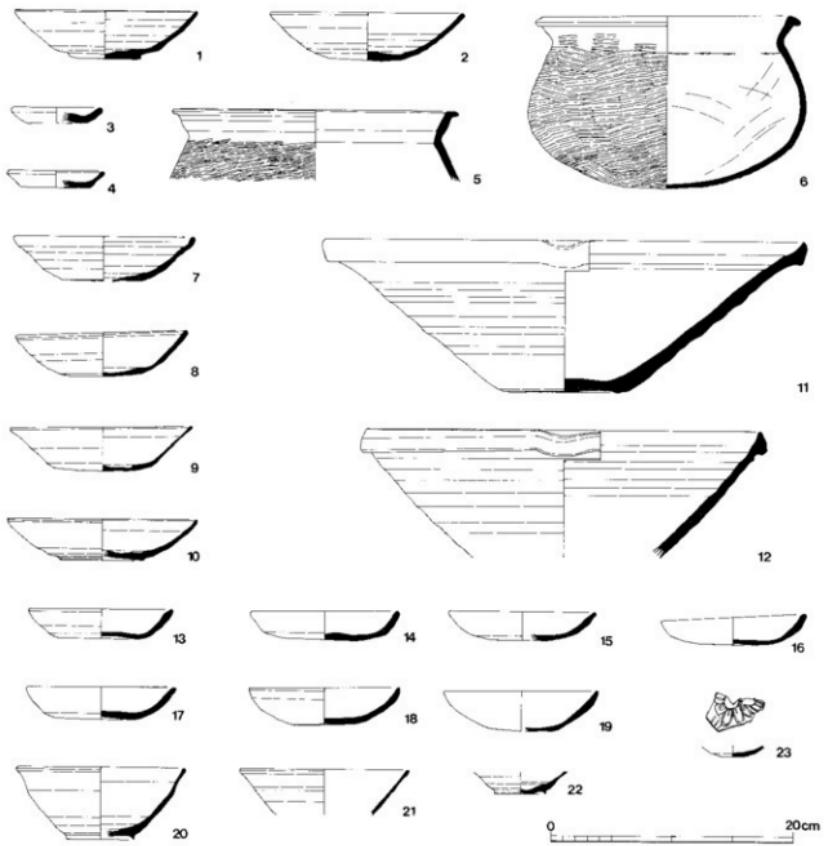


fig.432 E トレンチ出土遺物実測図

1~6 SK01

7~23 遺物包含層



fig. 433 E トレンチ磁気探査作業風景



fig. 434 F トレンチ全景（東から）

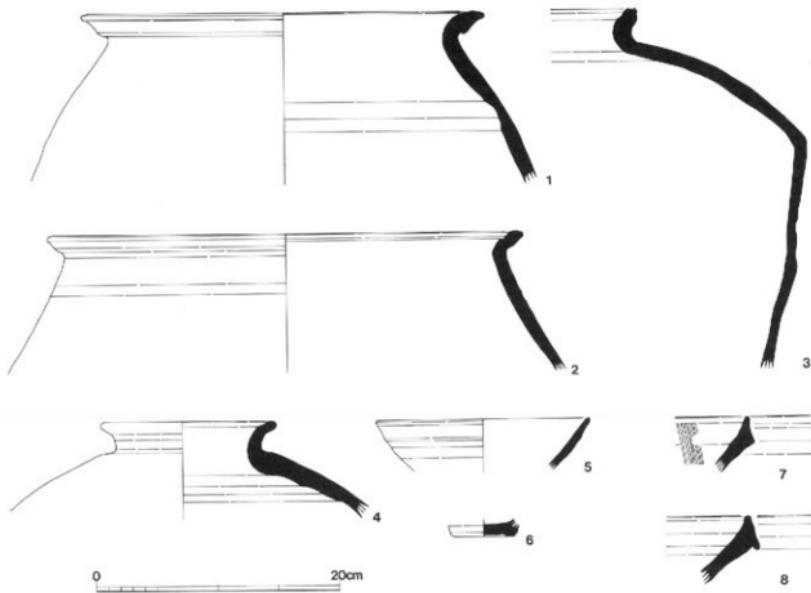


fig. 435 F トレンチ出土遺物実測図



fig.436 G トレンチ全景（北から）



fig.437 H トレンチ全景（北東から）

G トレンチ 約105m²の調査区である。水田の耕作に伴う溝を検出した。出土遺物が少なく、また細片が多いため、詳細な時期は不明である。

H トレンチ 北部の大半については耕土直下が地山面であり、遺構・遺物ともに確認されず、埋蔵文化財が確認されたのは、図示した範囲（約444m²）である。遺構は確認されなかつたが、須恵器片・土師器片・陶器片が出土している。

3.まとめ

今回の調査では、各トレンチにおいて多量の遺物が出土した。また、遺構については、A・B・C・Eの各トレンチで検出された。それぞれの遺構・遺物の時期については、Aトレンチが12世紀半ば～13世紀半ば、B・Cトレンチが12世紀後半～13世紀半ばのものである。Eトレンチについては13世紀後半～14世紀前半のもので、Fトレンチについては15世紀を中心とする時期のものである。また、遺物について特徴的なことは、中国・朝鮮製の磁器や国内の各地で生産された陶器が比較的多く出土していることである。このことは、調査地の北に山城が存在したことと大きな関連があるものと考えられる。

32. 行原遺跡 第2次・第4次調査

1. 遺跡の位置 本遺跡は摂津・播磨の境付近にその源を発し、南の六甲山系にはばまれ西に流下する淡河川北岸の狭隘な平野部分に位置する。今回の調査地点の標高は、約168mである。昨年度第1次調査が行われ、その際には、中世の遺物が確認され、遺構は土坑・自然流路などが検出されている。



fig.438
調査地点の位置
1:5000

2. 第2次調査の概要

基本層序 第1層現水田耕作土、第2層現水田床土、第3層旧耕土（暗灰色砂混じりシルト）、第4層灰色砂混じりシルト、第5層灰褐色砂混じりシルト、第6層「地山」（淡黄色～灰黄色粘土質シルト）。第3層～第5層に中世および弥生時代の遺物が含まれ、第5層を除去した段階で遺構確認面となる。

遺物包含層 第1層～第5層のいずれからも中世（主として13世紀代）の遺物と弥生時代の遺物が出土しているが、ほとんどは第3～5層出土である。28ℓコンテナに5箱程度の量が出土している。中世の遺物が圧倒的な量を占め、弥生時代の土器は2片のみである。前者は、須恵器・土師器・青磁・白磁・青白磁の食器類、瓦・火舎（火鉢）・鉄器などがある。下層において遺構の検出された部分での遺物の出土は多く、そこから離れるにしたがって包含層に含まれる遺物の量も減少する。

遺構 調査区の南部分に集中して、掘立柱建物址2（S B01・02）、火葬土坑2（S T01・02）、土坑2（S K01・02）、柱穴（S P01～14）、溝1（S D01）、流路2（S D02・03）が確認された。

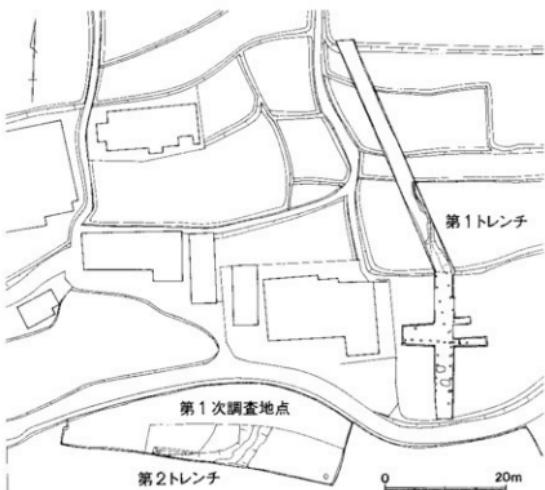


fig. 439 調査区平面図

S B01 柱間6尺（約1.8m）で東西1間・南北4間の掘立柱建物址である。柱据え付けのための掘形は平面円形で、径約20cmの比較的小型のものであり、建物の構造も簡単なものであったことが推察される。P-3・7には柱根が遺存していた。柱がなくなってから後に柱穴内に納められた土師器鍋がP-1から出土している。14世紀に比定される。

S B02 南北の柱間7尺（約2.1m）で東西4間以上・南北5間の縦柱の大型掘立柱建物址である。柱据え付けのための掘形は平面円形で、径約40cmである。横断面円形の柱痕を良好に残す部分が多くあり、その径は20cmに近く、かなり太い。また、建物の北壁部分にあたる柱列には主柱穴の中間に束柱のものと推定される浅い柱穴が認められる。

S B02は柱が腐朽してのち、その柱痕部分に土器を納めているものがある。P-10には土師器小皿を、P-12には須恵器碗を納めている。これらの土器の年代は12世紀末から13世紀代である。また、P-10・12の柱穴底部には腐朽しかかった柱が遺存していた。

なお、S B02のP-12・13付近から南は旧地形が段差を有し、一段下がっている。

S X01 この一段下がった部分を埋め立てて、段差のない平坦面が造成されており（S X01）、S B02の柱穴はこの盛り土を掘り込んでいる。この盛り土はS B02建築の際の造成と考えられる。この盛り土にも土器が含まれているが、その年代はS B02の柱穴の中から出土したものと型式差が認められない。柱痕に納められた土器の示す時期がこの屋敷の廃絶時期として認められるなら、この型式の土器が流通する間にこの建物は建築され、そして廃絶されたことが確認できることになる。S T01と切り合い関係にあり、S B02の方が古い。

S P03・14～16 S B02の柱穴と同じ主軸・柱間・掘形の柱穴が存在する。その並び具合などから、併あるいは掘立柱建物となる可能性が高いが、今回の調査においてはそれを確認することができなかった。S B02のP-06・13と切り合い関係にあり、S B02の方が古い。

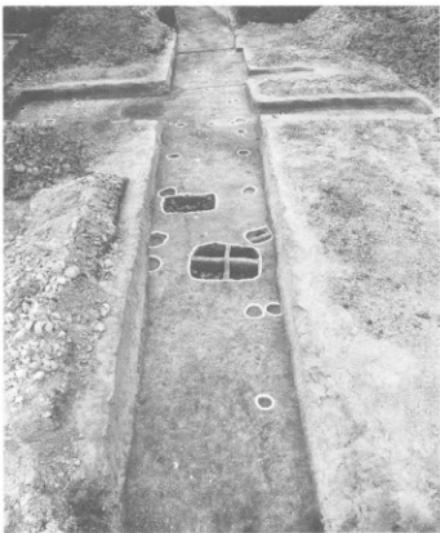


fig. 440 1 トレンチ南区全景（南から）



fig. 442 S B 01全景（南から）

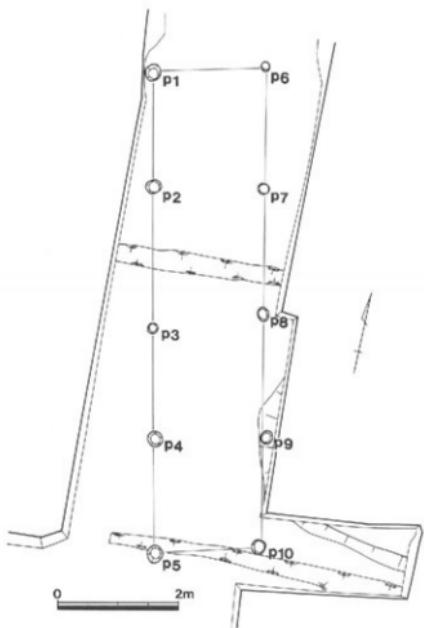


fig. 441 S B 01平面図

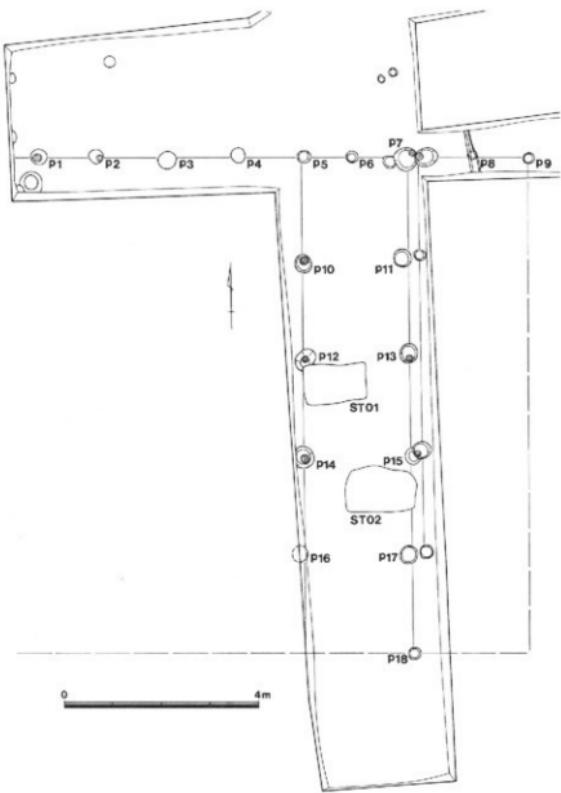


fig. 443 SB 02平面図



fig. 444 SB 02全景（北から）

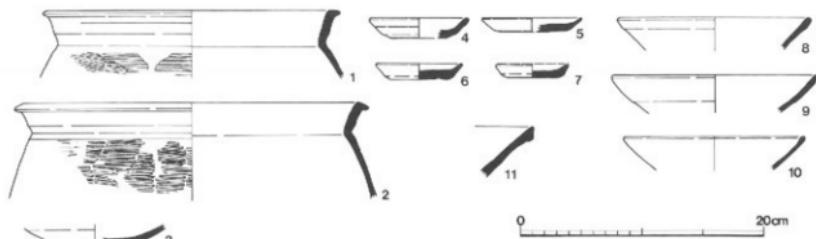


fig. 445 SB01・SB02出土遺物実測図 1～3 SB01 4～11 SB02



fig. 446 ST01・02全景(東から)

S T01 類例から火葬土坑と考えられる遺構である。平面の形状は隅円方形で、規模は東西80cm、南北130cmである。遺構確認面から床面の敷石上面までの深さは37cmである。敷石は約60×110cmの範囲に20個が敷かれる。敷石の上面の高さは平均しており凹凸は少ない。SB02のP-10と切りあい関係にあり、SB02の方が古い。

遺構の覆土は6層に大別できる。最上層 砂混じりシルト、第2層 炭、第3層 砂混じりシルト、第4層 炭、第5層 シルト、第6層 炭である。

第1層は暗褐色砂混じりシルトと灰色砂混じりシルトがブロック状に堆積した土層である。土器の小破片が比較的多く出土している。

第2層は一部に木の炭が認められるが、これもイネを主体とする炭層である。東側部分では10cm近くとかなり厚く堆積している。第2層中やその上下面に接する位置から木片や土器が多く出土している。また骨片1点も出土している。中央部に近いほど深い位置にあるという遺物の出土状況からすると、これらの遺物は原位置にあるものとは認めがたく、上部にあったものが下部の陥没によって落ち込んだものと考えられる。

第3層は第5層と同様の明オリーブ灰色シルトである。土器片や木片が少量含まれる。

第4層は薄い炭層で、この炭は木が焼けたものである。炭とともに一部がこげた木片やこげていない木片、土器などが出土している。

第5層は明オリーブ灰色シルトである。東部分はこの層が非常に薄く、6層の上に直接4層がのるような状態となっている。

床面の敷石を覆う炭層である第6層は当初の火葬の際に堆積した炭層である。この炭もイネを主体とする。骨は残されていなかった。底面の敷石の下面には炭が認められないが、その上面は火を受けた痕跡が明確に残る。このことから、敷石を据えてその後に火を焚いたことが確認できる。

比較的厚く堆積する炭層が間層をはさんで2枚あることから、火葬が2度行われた可能性が考えられる。第3層の堆積の状況は人為的に埋められたものではなく、自然堆積の様相を示している。また、第2層部分まで改めて掘削されたような痕跡も認められない。火葬が2度行われたとすれば、最初の火葬が行われた後、この土坑は埋め立てられることなしに放置され、その後一定の期間を経て、下部に土砂が自然堆積したそのままの状態で、新たに敷石を敷くことなどもなしに再び火葬土坑として使用されたと考えられる。なお、火葬に際して藁で遺骸を焼くという習俗は、比較的最近までみられたという。

遺物の出土は第2層・第6層の炭層に集中する。出土土器は上層のもの、下層のものともに12世紀末～13世紀代に比定される。上層出土の器種は小皿・碗・鍋などがある。小皿・碗は遺存度が高いものが多く、その場に供えられたものであると考えられる。外面に煤のついた鍋については一個体と考えられるものの破片が数点出土したにすぎない。下層出土の土器は小皿がある。

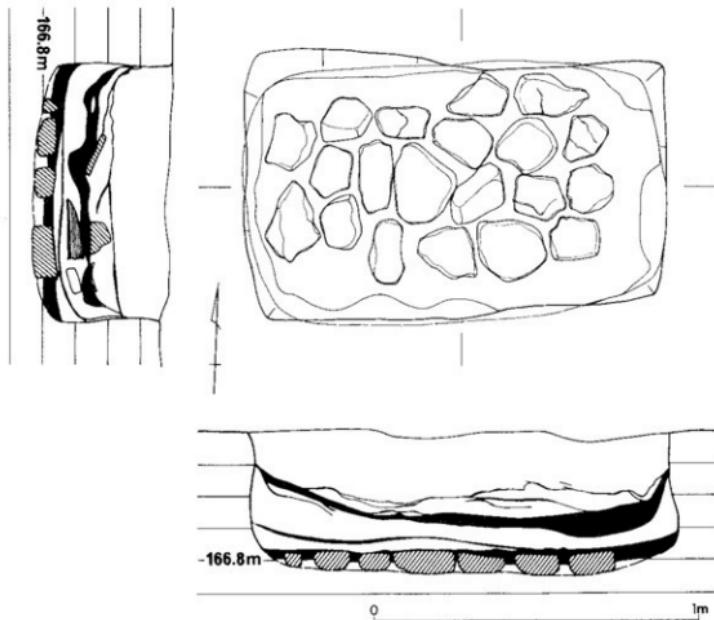


fig. 447
S T 01実測
図（黒塗は
純灰層）

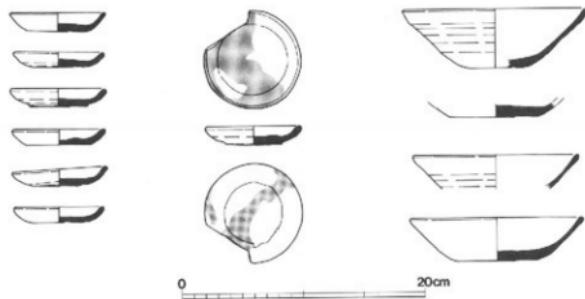


fig. 448 S T01出土遺物
実測図



fig. 449 S T01上層 (北から)

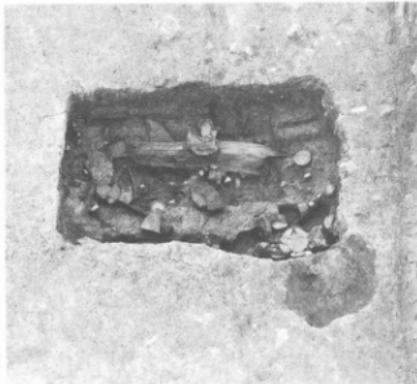


fig. 450 S T01中層 (北から)



fig. 451 S T01下層 (北から)



fig. 452 S T01完掘状況 (北から)

S T02

S T01と同様の遺構で、火葬土坑と考えられる。平面の形状は隅円方形で、規模は東西95cm、南北145cmである。遺構確認面から床面の敷石上面までの深さは35cmである。遺構の覆土は2層に大別できる。

上層の第1層は黄灰色シルト質粘土と灰色砂混じりシルトがブロック状に堆積したもので、明らかに人為的な埋め土である。土器の細片が含まれる。

下層の第2層は火葬の際の炭層である。この上面で13世紀に比定される土師器碗や一部がこげた木片、礫などが出土している。

この遺構も底面の敷石の下面で炭が認められたのは一個だけであった。またその上面はS T01ほどではないが、火をうけた痕跡が残り、敷石を掘えてその後に火を焚いたことが確認できる。敷石は約50×100cmの範囲に21個が敷かれる。S T01にくらべると、敷石の範囲も狭く、石の大小も不揃いである。また敷石上面も凹凸が目立つ。

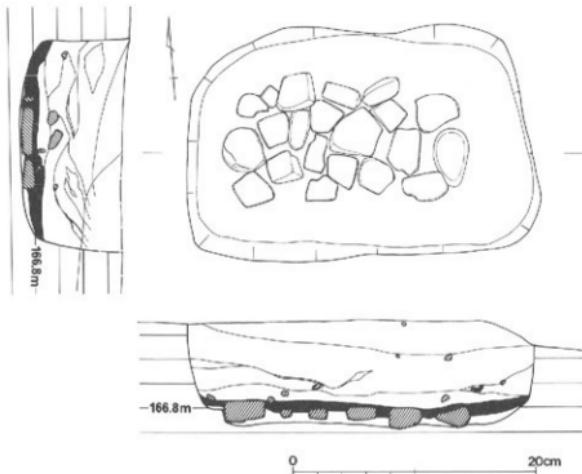


fig. 453 S T02実測図
(黒塗は純灰層)

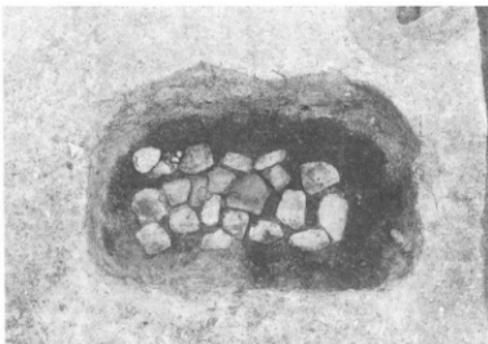


fig. 454 S T02近景（南から）

- S K 01** 径45×35cmの椭円形の土坑で、深さは約10cmである。覆土からは中世の土師器小皿の小破片1片が出土した。
- S K 02** 直径45cmの平面円形の土坑である。内側に径約25cmの正円形で環状の炭化物が確認された。土坑内におかれた曲物が炭化したものと考えられる。この遺構は上面を確認しただけで掘削を行っていない。
- S D 01** 南へ流下する溝状遺構で、遺物の出土はなかった。4層の下で確認されることから、中世以前のものと推定される。
- S D 02** 北から南へ流下し、調査区の南端付近で西へ流れを変える流路で、幅約5m、深さは約1.2mである。遺物の出土はなかったが、下層のシルト層からは植物遺体が比較的多く出土した。藤の実のさや・椿の実・櫻の実・アラカシなどさまざまな植物の葉などが出土している。また、このほかに昆虫遺体もみられた。
- S D 03** S D 02と並行するように北東から南西へ流下する流路である。今回の調査では西側の岸のみが確認された。深さは約1.2mである。遺物の出土はない。全掘せず東西方向の断ち割り調査のみを行った。

3. 第4次調査の概要

今回の調査は、平成2年4月に実施した試掘調査の結果に基づき埋蔵文化財が存在し、かつ設計上これに影響があると考えられる部分について調査を実施した。

調査区は、2本の小さな尾根に挟まれたゆるい斜面を利用して築かれた圃場の上下二枚にわたるもので、標高156～158mである。

基本層序 層序は、耕土、床土以下に灰色系と黄色系の土層が交互に2～数回堆積しこの下層に、礫混じりの暗灰茶色土、黄灰色粘質土～シルトの地山となる。遺物は耕土以下、地山面に至るまでの各層に認められるが、下層ほど良好である。また、いずれの層においても、耕作痕らしきものは観察されたが、遺構面として確認できたのは1面であった。

遺構面 すべての包含層除去後、黄灰色粘質土～シルト（礫混じり）の地山をベースとして溝2



fig. 455 調査区全景（北から）

条、土坑1基、圃場の区画であると考えられる段の削り出しが検出された。

溝 遺構は、全般に削平を受けており、深さ数cm程度しか残存しない。溝1は幅1.0~1.8m、平らな底で細かい砂の堆積がみられた。また、溝2は溝1と同方向に流れるもので、一部削平のため途切れている。どちらも中世の須恵器、土師器片を含むが小片である。

S X01 S X01は、長さ140cm×幅90~100cmの隅円長方形である。底面は平らで、深さ数~12cmである。上層は炭混じりの淡灰黄色土で、下層は炭混じりの灰層である。灰は藁状の焼けたものが多く、焦げた木片や炭片が混じる。また、壁面は火を受け赤褐色になった部分もある。拳大の川原石が数個と若干の土器片が認められた。形状等から中世の火葬に使用した土坑であると考えられる。

田 園 調査区内で、地山の削り出しによって区画されるものが計4枚分検出された。段差はそれぞれ10~20cmであり、中世以降のものであろう。



fig. 456 S X01近景（東から）

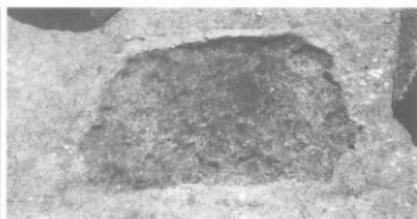


fig. 457 S X01完掘状況（東から）

4.まとめ

圃場整備事業あるいは道路建設事業などに先立つ調査によって、これまで不明確であった屏風川流域における開発の進展が、少しづつ明らかにされている。萩原・行原・中山・屏風などの調査では縄文時代・奈良時代などの人々の生活の痕跡が確認されているが、本格的に田地が開発され、人々が継続的に住むようになるのは、平安時代末から鎌倉時代に入ってからである。今回の調査で確認された中世の村落も、このような開発の進展の結果、営まれたもののひとつとして位置づけることが可能であろう。

第2次調査で確認された7尺1間の柱間で南北5間・東西4間以上の総柱建物S B02はいかにも大きい。また、この建物からは柱穴の中に納められた状況で土器が出土しており、この土器はこの建物を廃絶する際に儀礼に伴って納められたものと推測される。このような建物の規模をもつ点や儀礼を行っている点は、この建物に居住していた人々の階層を暗示する。

また、遺構は確認されなかったが、遺物包含層から弥生時代中期の土器が2片出土している。わずかな資料数とはいえ、淡河川流域ではこれまで確認されていなかったこの時代の遺跡の存在が明らかになったことは注目されよう。

第4次調査は、比較的小規模なものであったが、中世の遺構面が存在することを確認できた。特に、S X01については、第2次調査において検出された火葬土坑と同様の遺構と推定されるが、底面に敷石がないことや遺物が少ないとなどや異なる点も見受けられる。今後、この種の遺構の形態や分布を考える上で良い資料となるであろう。

III. 保存科学作業の概要

平成3年度に保存科学の手法によって行った作業は、大きくは遺構と遺物に関するものに分けることができる。以下がその概要である。

なお、本年度途中より、従来の木器処理棟から新設の埋蔵文化財センターに移設・増設を行い、作業を行っている。

1. 遺構に関する保存科学作業

玉津・田中遺跡 調査により数面の水田址が検出されたが、弥生時代後期の水田址に明瞭な人の足跡が検出された。その記録を残す方法の一つとして、また、埋蔵文化財センターの常設展示を目的として、平面での土層転写を行った。転写用樹脂としては、1次塗布に商品名（トマックNS-10）、2次塗布に商品名（トマックNR-51）を用いた。

印路遺跡 玉津・田中遺跡と同様に数面の水田址が検出されている。このうち、弥生時代前期の水田土壤および畦畔の断面について土層転写を行った。断面からの湧水の激しい部分があるため、1・2次塗布ともに商品名（トマックNS-10）を転写用樹脂として用いた。しかし、特に湧水が激しい部分については、樹脂膜がうきあがり十分な転写を行うことができなかった。



fig. 458 1次樹脂塗布後裏打ガーゼを貼る（印路遺跡）



fig. 459 剥し取る前に標高を記入（印路遺跡）



fig. 460 硬化後断面から剥し取る（印路遺跡）



fig. 461 搬入するため土層転写を巻く（印路遺跡）

北神第2地点・第
3地点古墳

北神第3地点古墳は、横穴式石室を埋葬施設としている。この石室の北西隅の壁体最下段の石材に「○」印の線刻が二箇所で認められた。両古墳は調査後埋め戻されるため、この線刻を記録する1つの方法としてシリコンによる型取りを行った。離型剤としては、水溶性洗剤を用いてシリコンの塗布を行った。型持たせには、発泡ウレタンを用いた。

なお、埋め戻しを行う前に、石室石材の強化と保護を図るために、強化剤商品名OHの噴霧を行った。石材は、凝灰質砂岩である。

行原遺跡

本年度は第2次と第4次調査で、13~14世紀の火葬土坑を3基検出している。形態上の特徴から火葬址と推定しているが、物的証左はない。この埋土内の炭化物を多く含む土壤のプラント・オパール分析調査と炭化材の樹種同定調査を行い、(パレオ・ラボ)、燃焼物の復元を試みた。その結果、外部から流入したと思われる微化石も若干含まれるが、それらを除くとイネおよびイネ科メダケ属ネザサ節(ネザサ、ゴギダケ等)の珪酸体とアカガシ亜属を中心とする常緑広葉樹が、燃焼材として用いられていることが明らかになった。しかし、これらの比率を判断できるデーターは得られていない。樹木についても、この地域での同時代の植生復元資料が現時点ではないため、火葬にあたって材が選択されたか否かは判断できない。

なお、プラント・オパール検出の前処理において過酸化水素に過敏に反応したことは、土壤中に多量のカルシウムが含まれていることを示しており、火葬址であったことを暗示している。

検出した3基のうち、床面の石敷きが良好なST01を保持するため、遺構の型取り転写を行った。方法は転写用樹脂(商品名NS10)の原液を石以外の型取り範囲全体に塗布し、裏打ち後発泡ウレタンの充填を行った。周辺の記録調査終了後、重機により切り離しを行った。その後、裏側に転写用樹脂(商品名NR51)を塗布し、FRPで補強し、さらに発泡ウレタンで台を作製している。



fig.462 石室の石材に強化剤を塗布(北神第2地点古墳)



fig.463 発泡ウレタンに再転写終了(行原遺跡火葬土坑)

2. 遺物に関する保存科学作業

出合遺跡 調査の結果、弥生時代～古墳時代の数条の流路と弥生時代中期の方形周溝墓が検出された。

第27次調査 流路は人工的に管理されており、杭列による水の誘導が行われているが、その目的や管理形態は明確ではない。杭および一部の流木について樹種同定と、わずかではあるものの花粉分析を行っている（パレオ・ラボ）。流路には調査の結果、時期差が設定されているが、各流路の材と自然木の同定の結果にも明確に用いられた材の相違が表れている。例えば、杭材にまったくマツ属を含まない流路と、約25%の割合でマツ属が用いられている流路がある。この結果が単純に周辺植生の変化による時期差を表すのか、耐水性に優れるマツ属の利用段階を示しているのかは、今後の周囲での資料の増加を待たなくてはならない。

流路4からは、ウシクサ属と同定（パレオ・ラボ）された植物遺体層が検出された。これは流路4の進行方向に直交する方向に幾重にも重ねられていた。その構造や用途は不明である。重ねられた平面的単位を記録する方法の一つとして平面転写を行い、PEG含浸（PFG4000）を行った。含浸時間は6ヶ月、最終濃度は90%である。

玉津田中遺跡 流路に伴う杭材を中心として92点の木製品が出土している。樹種同定調査後、PEG含浸処置を予定しているが、それまでの間、仮パックによる保存を行っている。その他にモモ核、ウリの種、炭化米などの大型植物遺体も採集されている。一部はアルコールによる脱水後、パラロイドB72による含浸を行っている。これらは弥生人の食生活を考える上で貴重な資料である。



fig. 464 大型PEG含浸槽設置状況



fig. 465 同左 含浸準備

新方遺跡大日地点 調査範囲が狭いため、遺構の性格が不鮮明であるが、S X304と呼ぶ落ち込みからイノシシ類の下頸骨2体が出土している。出土状況はいずれも逆さになっており、頭蓋骨など他の部位の存在は不明であった。他の部位の存在を予想し、現地での洗浄等はあまり行わず、前処理としての硬化も施さずに、両方とも約30×40cmの範囲を発泡ウレタンで梱包して取り上げを行った。

取り上げの後、裏側から注意深く土を取り除き、遺体の検出作業を行った。下顎骨以外の部位は全く認められなかった。よって、埋まる前にはすでに肉は取り除かれ、骨格だけになっていたと推定される。両者とも歯牙を欠落させているが、他の歯がほとんど残っている点や、切り取りにより周囲の土壤を洗い出した結果、歯牙の痕跡が認められない点から少なくとも埋まる前に、すでに抜き取られていたものと考えられる。イノシシの場合歯牙のみが骨器の素材として利用されていることが多く、今回の二者も歯牙は骨器として利用されたのであろう。両者ともカットマーク（解体時の痕跡）は残されていなかったが、1体には左右の下顎枝頬面に直径約3cmの穿孔が施されている。もう1体は下顎枝が欠損しており、穿孔の有無は不明であるが、下顎連合部背面が穿孔されている。下顎枝の穿孔例は弥生時代のイノシシ類に多く認められており、いずれも歯牙を欠いている。この加工が解体によるものか、儀礼によるものと考えられるが、すべての遺体が穿孔を受けてはいないことを勘案すると儀礼に伴う痕跡である可能性が高い。なお、1体は連合部の中間がわずかにくぼんでおり、ブタである可能性もある。今後の検討を必要としている。

以上の表面観察を終えた後にメチルアルコールによる脱水を少しずつ行い、その後徐々に乾燥をさせたが、ヒビアナイトの析出はまったく見られなかった。次に、アクリル樹脂（商品名バラロイドB72）5%を数回塗布し、硬化後、エポキシ系樹脂で接着を行った。さらに、欠損部には最低限の補てんをエポキシ系樹脂で施している。この他に水洗選別により検出した歯・魚骨も同様にアクリル樹脂を含浸させている。



fig. 466 発泡ウレタンで梱包して取り上げる

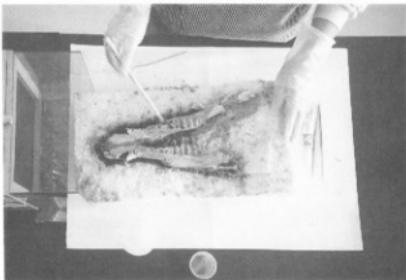


fig. 467 洗浄およびアルコール脱水作業

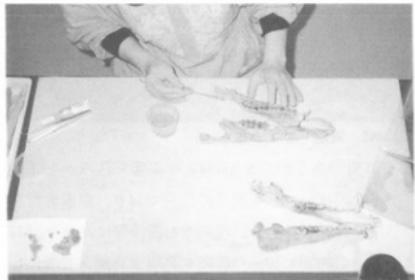


fig. 468 接合・補強作業



fig. 469 応急処置の完了した下顎骨（楠華堂撮影）

高塚山古墳群 2号墳の線刻画石は、株式会社近畿ウレタン工事によって取り上げを行い、樹脂含浸後第1次調査 表面処理を行った。調査中なるべく乾燥しないよう養生を行ったが、作業上やむを得ず湿乾を繰り返している。こうした湿度変化に伴い徐々に0.5mm以下のクラックが目につくようになつた。樹脂含浸後の最終的な乾燥によって、このような細かなクラックが一斉に多数表れたが、これらも現在（処理後約2年）では安定した状態にある。

遺物としては207点の鉄製品が出土している。内8点は耳環で、他は馬具や鎌・刀などの武具類である。保存処理途中であるため、詳細は不明である。

大田町遺跡 古墳時代～平安時代の遺物が出土しているが、その中に約150点の金属器が含まれている。脱塗、サビ取り作業が終了していないので、詳細は不明な点が多いが、約1/3は鉛滓とみられる。銅鏡も6点以上認められる。鉄製品には鎌・刀子・釘などがあり、この他にも鉛製のものや銅製とみられるものもある。今後の作業により、遺跡の性格を物語る遺物が明らかになる可能性が高い。

金属器以外では鹿角製品を含む動物遺体が91体以上出土している。大半は獸骨でわずかに魚類を含んでいる。いずれも食料の残渣とみられ、当時の食生活復元の資料となりえるものである。まだ同定を終えていないが、樹脂含浸（商品名パラロイドB72）は終了し、接合を終えている。

雲井遺跡 焼石のジルコンとアパタイトのファッショントラック長を測定し、被熱の推定を行った最初の遺跡出土資料は、この雲井遺跡の縄文時代早期の集石土坑に含まれる赤色化した花崗岩円礫である。概要についてはすでに別報（日本文化財科学会）がある。この方法により、被熱量の推定できる資料が増えれば、縄文時代の集石遺構の新たな類型が設定でき、機能論にも展開することが可能になると考えられる。



fig.470 高塚山2号墳線刻画石材取り上げ

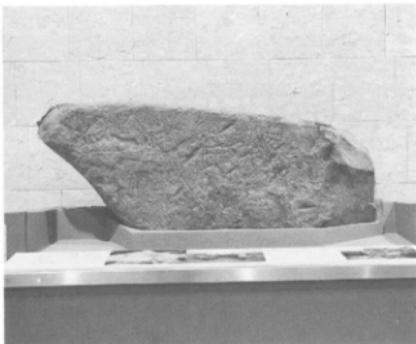


fig.471 同左 展示状況（埋蔵文化財センター）

埋蔵文化財センターの展示資料

常設展示に関する遺物・遺構について作業を行っている。遺構として、垂水日向遺跡第1次調査時に型取りをしておいた足跡群について、型をもとに複製品の作製を行つた。

現地では和紙を離型材として発泡ウレタンで型取りを行った。この型の表面に、現地の土に水を含ませたものを2~3cm層に均一に塗り、その後、土層転写の要領で樹脂層を形成し、形を保持させるためにFRPを施した。別途作製した骨組みをFRPと発泡ウレタンで接着させ、天地を逆にして、当初の型を取りはずしている。部分的に表面の補修を行い、樹脂で表面調整を行っている。

遺物に関しては、金属器、木製品、動物遺体についてそれぞれ処置を施している。金属器についてはまだ十分にサビの除去を終えていないものは、アクリル樹脂（商品名バラロイドB72）の含浸に止めている。いずれも展示前に再含浸を行っている。木製品は再度表面処理を行い、補填を施した。動物遺体も再度アクリル樹脂を含浸させている。これらの処置とは別に、弥生土器の胎土観察用プレパラートを作製し、各産地別の顕微鏡写真を解説用に用いている。

企画展に関するものとしては、複製鏡（内田秀俊氏所蔵）の鏡面研磨、甕棺の展示台への固定作業を行った。鏡面は耐水研磨紙で#1000まで研磨し、次に#1500までアランダムを用い、最終的にはダイア液で仕上げを行った。均正な凸鏡として整形することに困難を伴った。甕棺の固定には発泡ウレタンを用い、表面には樹脂を用い土を固定している。



fig.472 複製鏡研磨用台の作製

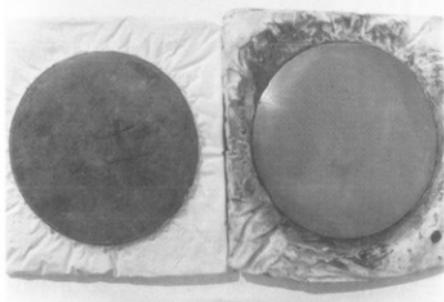


fig.473 複製鏡研磨前と研磨途中



fig.474 屏風遺跡出土の呪符木簡赤外線写真

平成 3 年度 神戸市埋蔵文化財年報

額価 2500円

平成 6 年 3 月 印刷

平成 6 年 3 月 発行

発 行 神戸市教育委員会

神戸市中央区加納町 6 丁目 5 番 1 号

☎078 (331) 8181

印 刷 大和出版印刷株式会社

神戸市東灘区向洋町東 2 - 7 - 2

☎078 (857) 2355

広報印刷物登録・平成 5 年度 第265号 (A - 6 項)



この本文は、再生紙を使用しています。